

I S 世界のMS少女

L I A

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

IS世界に転生したガノタが他のガノタに振り回されながらがんばるお話

8 話
7 話
6 話
5 話
4 話
3 話
2 話
1 話

--	--	--	--	--	--	--	--

95 80 66 47 41 29 12 1

目次

1 話

ふと気づけば、そこは見覚えの無い部屋だった。

「やあ、気づいたかい。早速だけど、君に頼みたいことがある」

どこぞの金持ちの書齋を思わせる、本棚が壁際を埋め尽くした部屋。毛足の長い絨毯にマホガニー製と思われる重厚なデスク。

席に着いてこつちを向いてるのは、部屋の雰囲気こそぐわらないホスト風のチャライイケメンにーちゃん。

——オレは、死んだはずだ。

「ああ、そうだ。キミは風邪をこじらせた肺炎が急激に悪化して自室で一人寂しく死んだ。それは覚えているだろう？ そんなキミの魂をボクが拾い上げて此処に呼び寄せた」

——魂？

ふと、視線を下げる。見下ろせば見慣れたはずの体は無く、皮張りの一人掛けソファが目に入った。

どうやら自分は体の無い意識だけの存在としてここに居るようだ。……感情が、揺れ

ない。

「錯乱されても困るのでね、こちらで強制的に平静になるように処置させてもらっている」

——頼みたいことがあると言ったな。それはなんだ。

動揺が無いのが非常にキモチワルイ。だが、こうしていてもはじまらないのも確かなので先を促す。

「話が済んだらちゃんと元に戻してあげるよ。心配しないでいい。それで、頼みというのはだね

キミに、別の世界に転生してもらいたい」

——……は？

「転生先は『インフィニット・ストラトス』転生に際しての希望は3つまで受け付けよう。

なにか質問は？」

いろいろと聞きたい事はある。まず……。

——なぜ、オレなんだ？

「ぶつちやけて言えば誰でも良かった。キミじゃなくてもいい。断る権利はちゃんとある」

——断った場合、オレはどうなる。

「その場合は通常の死者の処理に戻される。生前の記憶を漂白され、輪廻の輪の中に還っていくだけさ。そしてボクはまた、別の魂に話を持ちかける。実際断った魂もいたしね」

——じゃあオマエは、神かなにかなのか。

「まああながち間違つても無いかな。ボク自身は中間管理職みたいな立ち位地だけど」

——転生させる目的は何だ。

「思考実験。という名の娯楽さ。『ボクたち』の中には暇を持て余しているものも多くな。あまりに刺激が少ないと磨耗して消滅してしまう。んで、そうなると世界の維持管理に不具合が出てしまうんだ」

——要は見世物か

「一般人を参加させるタイプのバラエティ番組あるだろう？ ああいうものだと思ってくれ」

——……この話、受けた場合のメリットは？ あとデメリット。

「デメリットはアレだね。プライバシーの侵害かな？ まあ常に他者の目を意識した行動をとられても面白くないから、この項目に関しては記憶封印を掛けさせてもらうけど。」

メリットは記憶を引き継いで人生をもう一度やり直せるだけでもだいぶ破格だと思うけど？ あとあれだ、転生特典」

——……特典？

「ああ、以前参加者に「ならチートをよこせ！」って言われてしまつてね。それはそれで面白くなるからそれ以降渡すようにしてるんだ。数は3つ、内容は応相談」

何度も行つてるのかこの野郎、と内心思うも、やはり不思議なくらい冷静なままだ。ともあれ、質疑応答を続けよう。

——転生したあとはどうすればいい？

「好きに生きればいいんじゃないかな。こつちとしてはキミがどう生きるのかを観賞できればそれでいいし」

——転生先で死んだらどうなる？

「こつちに戻ってきてきて観賞してた方々からの感想を伝えて、あとは通常の死者と同じように処理。参加してくれたことへの感謝としてその次の生で運が良くなるように祝福をかけておしまい、かな。まあウケ次第などところもあるけど」

……破格といえば、破格。デメリットらしいデメリットが殆ど無い……と思うのは感情が抑制されているからか？ しかし実際転生した後は見られていることを認識できなくなるわけだから、主観的にはほぼ無いとも言える。

——特典は、応相談、と言ったな

「受けてくれるのかい？」

——……ああ、受けよう

「OK、ありがとう。さて、どんな特典が欲しい？」

その言葉に改めて考える。

思い返すのは生前のこと。自分は体が弱かった。ちよつと運動すればすぐ熱を出し、学生時代の体育は殆ど見学。成人して就職してからも年に一度は風邪などの病気で休みをとっていた。

アレルギー持ちで食べられないものもあつたし、花粉症もひどかつた。

……よし、最初の1つはコレだ

——健康で健全な体をくれ。遺伝病や花粉症などのアレルギー、虫歯なんかにかからない、アホみたいに頑丈な体を

「病気に一切かからない、でいいのかい？」

——ああ、それでいい

ふむ、とホストっぽいのは一つ頷き、問題ない、それじゃあ二つ目は？と返してきた。再び考える。

転生先は『インフィニット・ストラトス』。タイトルと同名のマルチパワードスーツに

よって女尊男卑へと傾いてしまった世界。かわいい女の子たちがわんさと出てくるハイスピード学園バトルラブコメディ。

となると、男に生まれるのは却下だ。せっかくのメカ、即ちISに触れられない。かといって、女に生まれても今度は女の子とキヤツキヤウフフできない。……そこ、煩惱塗れとか言うな。煩惱無くして何が人生か。萌えと燃えは心の必須栄養素です。

……コホン

肉体が無いので意味は無いが、気分だけでも咳払いして気を取り直す。

ISに触れたければ、原作主人公の織斑一夏と同じように男でもISを操縦できるようにしてもらえばいい。しかしそれでは男性操縦者を巡るもろもろのトラブルに巻き込まれてしまう。ならば女性としてIS操縦者を目指した方がまだ面倒は少ないかもしれない。

狭き門ではあるが、可能性はあるはずだ。

では女性として生まれた場合のデメリットはなんだ。言うまでもない、女の子とニヤンニヤンできなくなることだ！ できなくなることだ！

それ以外だと、女尊男卑の風潮から比較的デメリットは少なくなる……はず。そこでふと、思いついたことを訊ねてみる。

——運命とか、因縁とか……そういうものも特典として操作できるか？

「できるよ。實際別のケースだとその世界の主人公の幼馴染として隣の家に引越してくる、という運命を特典にした者もいた。おかげで本来は一人しか居ないはずの幼馴染が12人とかいう事態に陥ったけど」

おーけー、ならばイケるかっ!?

——可愛くて性格のいい同性愛嗜好の女の子たちとめぐり合う運命をくれ。

「……ほう?」

——可愛くて性格のいい同性愛嗜好の女の子たちとめぐり合う運命をくれ。あ、一つ目に付随する形で女の子に生まれるようにもしてくれ。

「いや、二回言わなくていいから。めぐり合うだけで良いのかい?」

——ああ、性格よくても相性が悪いというのはあるだろうし、仲良くなるのは自分でやらないと意味が無い。オレは過程も大事にしたい派なんだ。

「そうか。キミの趣味嗜好は置いとくけど問題は無いよ。『そういう』女の子と出会ったら分かるようにした方がいいかい?」

よし通った……っ!

——ああ、いや……そうだな……わからなくていい。悩んだ末に秘密を打ち明けられる、というシチュも、萌える。

「そうかい」

流しやがったな。まあいい、3つ目だ。

……お、おもいつかない……？

いや待て、慌てるな。まだ慌てるような時間じゃない。思いつかないなら、今までの願い2つをフォローするようなのを考えればいいんだ！

1つ目、は特にフォローするような内容じゃないよな。健康に暮らしたいがための特典だし。

じゃあフォローは2つ目か。当たり前といえれば当たり前か。いくら女尊男卑に傾いたといえども、同性愛は忌避される可能性が高い。ならば考えよう、どうして忌避されるかを！

……子どもが出来ない？

うんそうだよな、子孫をのこせないのはまずいもんな。となるとフォローすべきはここなんだが……どうやってフォローするか……っ。

——3つ目だ。

「なんだい」

——同性間で子供が作れる技術が発明されるようにしてくれ。

「……ほう」

——……無理か？

「いいや、問題ない。キミ自身がその技術・能力を持つ、という形ではないんだね？」

——ああ。オレだけが恩恵にあずかるのではダメだ。みんなで幸せにならないとな。

「……ふうん。いいだろう。特典は一度決定したら変更できない。コレでいいかい？」

——ああ、かまわない。

「よし。では最後に、転生したら前世の記憶や人格などが戻ってくるのは3歳の誕生日だ。その後は好きに生きてくれ」

——ああ、わかった、世話になったな。

「なに、いいさ。それでは二度目の人生、楽しんでくれたまえ。終わったら、また会おう」

ぼんやりとした眠気が意識を覆っていく。転生のための処理が始まったのだろう。

「ああそうだ、キミが転生する世界にはキミ以外にも転生させた者たちがいる。彼ら彼女らはキミと同じく、特定の傾向を持った者たちだ。仲良くするも敵対するも好きにするといい」

なんかチャラにーちゃんが言ってるがうまくいしきできない。

そうして、オレは転生した

*

ふと気づけばわたしは『雪菜Ⅱシユネーライン』として生きていた。

・
・
・

雪菜？

なんかどっかで聞いたような名前……？

………っ!?

「ぎやるくしよんっ!？」

「ほわっ!？ え、なにになにっ!？ どうしたの雪菜っ!？」

側にいたアツシユブロンドの美人なおねーさんがおどろく。……おねーさん？ いや
ちがう、この人は自分の母親だ。

そしてわたしは『雪菜Ⅱシユネーライン』

前世において、ガンダムエースという雑誌で連載されてたMSGというイラストコラ
ムの主人公にして、さまざまなモバイルスーツの意匠を施した衣装を着せられていた、M

S 少女その人である……っ！

いまは、3歳児だけど

2話

さて、3歳の誕生日に記憶が戻ってからはや2年と少々。現在5歳児なわたし、雪菜です。

いまわたしがなにをやってるかというと。

「あはははははー！」

走ってます。

「あははははははは!!」

ご近所を。

「あははははははははは!!!」

全力で。

いや待ってくれ。ちやうねん。おかしくなったわけちやうねん。

チートや! このチートボデーがいけないんやつ!

なにせこのチートボデー、いくらハシヤギまくつても息が切れて疲れるだけで翌日には一切疲労を残さない。当然のことながら熱が出て寝込むとかそんな体調不良は決して起こさない。

当たり前といえば当たり前なのだが、前世では幼児期からしょっちゅう熱を出して寝込んでた身としてはひたすら全力で動き回っても、たつぷりご飯を食べてぐっすり眠れば翌日にはまた全開で動き回れるというのが楽しくて仕方が無いのだ。

なので全力で遊び呆けてても仕方ないよね！

セミ取りのために木に登って高さ3mから落ちても！

紅葉して落ちてくる葉っぱを空中で捕まえようとして歩道走ってた自転車とぶつかっても！

公園の池にやってきた鴨を餌付けして捕まえようとして池ポチャしても！

わたし、のつとぎるてい!!

あ、ちなみに住んでるのは日本の片田舎です。こんな時代でも自然が豊富に残ってるのに都心には電車で一本で行けるといふ立地です。

田舎ちがう？ いやでも家の周り田んぼとか畑ばっかだし、お隣の家まで20m離れてるんだよなあ。まあおかげで遊ぶ場所には事欠かない。野山を駆け回るなんて、前世でも機会が無かった。体調的な意味と場所的な意味の二つで。

でもって、アッシュブロンドな髪と苗字から察しがつくと思うけどわたしは日本人じゃない。日独ハーフだ。

おかん共々世話になってるのは私の父方の祖父母であるらしい三河のじいちゃん

ばあちゃんのところ。このへん、なんか深い事情があるらしいんだけどわたしには教えてくれない。なぜおとんが居ないのかも。

まあ、たぶん幼児にはまだ早いと思つて教えてくれないだけだろう。よつていまはひたすら遊び倒すつ！ 今日テレビで見たパルクールの再現（っぽいもの）だ！

そうやって遊んでたら上空を何かが通過していき、サイレンの音が響き渡つた。

……？ あ、白騎士事件つてこの頃だっけ？ 原作つてよく憶えてないんだよなあ。

*

しよーがくせーに、なりましたーっ！ いや保育園にもちちゃんと通つてたけどね。

白騎士事件以降、世間はてんやわんやだったようだけど、幼児にはなんももんかんけいなく遊んで過ごしてておりました。

それよりも、とにかくひたすら外を走り回つては面白そうなものを見つけるとソッコで突っ込んでハシヤイでたらいつの間にか近所のやんちゃ坊主どもが舎弟になつてた件について。ガキ大将を指摘してたつもりはないんだけどなあ。

そんな女の子とは思えない遊び方をしてるわたしに、ついにおかんがキレました。

とは言っても声を荒げて叱り飛ばしてきたわけじゃあない。もつとおそろしい策略を仕掛けてきたのだ。

この時期になると、おかんが何をお仕事にしているのか教えてくれるようになった。ガツコから親の仕事を調べようという宿題が出たので聞いてみたら教えてくれた。

なんと、服飾デザイナーだというのだ！ すげー！ おかんすげー！

で、「どうせなら、ママのお仕事見学しに来る？」なんて言われたのでホイホイ着いて行つたのだ。その先に何があるかなんで気づかずに。

「はーい雪菜ちゃん、こっち向いてー」

パシヤリ

「はいじゃあちよつとしゃがんでー。そうそうそのままー」

パシヤリパシヤリ

「いいわーいいわー。笑顔そのままー」

パシヤリパシヤリパシヤリ

あい、雪菜です。

げんごい羞恥刑に処せられております。

おかんの職場である服飾メーカーに見学に連れてつてもらい、ガツコの宿題として提出するノートにいろいろと聞いたことを書きつけたあと、ふと、こんなことを言われま

した。

「モデルやってみない？」と……。

当然断りましたよわたしは。なにが悲しゆーて動きにくいひらっひらーのふりっふりー、を着なくてはならんのか。されど逃げ場はありませんでした。おかんの手によって塞がれてしまったのです。

「雪菜ちゃん、ママ最近ちよつと雪菜ちゃんに言いたいことあるかなー」

「な、なにかなおかんー」

「もうちよつと、女の子らしさ身につけよつかー」

「い、いえすまむっ！」

あのえがおはこわかったとです、はい。

まあそんなわけで。服飾メーカー『ネエル・アーガマ』の新作カタログにキッズモデルとしてわたしの写真が使われることになってしまいました。おのれー。

ちなみに、そのカタログを見たよそさまから仕事の依頼が来たようですが断ってもらいました。恥を広げる気は無いんじゃない！ けどおかんの要請だけは断りきれず、その後ネエル・アーガマのカタログモデルとしてだけお仕事することに。

社員の身内だから報酬は安いんだけど、それでも子どもに渡すのはちよつと躊躇う金額がわたしの専用口座に振り込まれるようになりました。うん、これは将来必要になる

ときまでとっておこう。

社名には、突っ込まないぞ。

*

小学3年生になりました！

わたしの通う小学校では、3年生になるとクラブ活動なるものが行われるようになります。週に2・3回放課後に集まってわちゃわちゃやるのです。擬似部活動みたいなもんだね。

で、わたしは何に入ろうかちよいと迷った結果、バスケット部にしてみました。

思い出してないぞー？

「少女はスポコン！ コーチは□リコン!?」なんてフレーズ、思い出してないぞーう？
さて、そんなかんじで新学期も一ヶ月あまりが過ぎ去り、バスケット部の活動でちよつと遅くなった帰り道をスーパ一の駄菓子コーナーで買ったゴムボールでドリブルしながら帰ってたときのこと。近道として通り抜けようとした団地そばの小さな公園にクラスメイトがいるのに気がついた。

あのちよつとぼつちやり体格にふわふわの癖毛は……たしか馬場さん、だとおもう。あんまクラスの女子覚えてないんだよ、男子とぼつかり遊んでるから。バスケ部の仲間とは別だけど。で、その馬場さんが1人ブランコに座ってゆらゆら揺れてたので声を掛けてみることにした。いやだって、もう結構遅い時間だぞ？ 放課後遊び呆けてた悪ガキどもも家に帰る時間だぞ？

「どした、こんなところで」

隣のブランコに座るまでこつちに気づいてなかったらしい彼女ははっ、と俯かせていた顔を上げて驚いた表情を見せてくる。そんなに意外か？ わたしが声かけるの。女子には優しく接してるつもりだったんだがなあ。

「あ、シユネーライン……さん」

「もう遅いぞ。帰んなくていいのか？」

そう問いかけるとまた俯いてしまう。あー、こりや家でなんかあったな？ ほれほれ、おじさんに話してみんさい。

んで、聞き出してみた所、パパとママがけんかばかりでいやだ、帰りたくない、とのこと。内心で（あちゃー）とか思ってたけれど、こうなったらもう愚痴を聞くだけ聞こう、とぼつりぼつりと零れ落ちてくる言葉にうんうんと相槌打ってひたすら聞き役に徹する。

30分は聞き続けたか、ちよつとすつきりした様子の馬場さんに、こんどはこつちから言葉を投げかける。

「んでさ、それ。そうやって馬場さんが考えたり感じたりしてるってこと。ちゃんとパパとママに言つたか？」

「……………え？」

思つてもみなかつた。そんな顔でふるふると首を横に振る馬場さん。

「やっぱさ、家族だから言わなくてもわかることつてあるじゃん？ でもさ、逆に家族だからこそ言わなくちゃわかんないこともあると思うんだ」

だから、自分はこう感じた、こう思つた、こう考えた、つていうのをはつきり伝えるのは大事だと思うんだ、と締めくくる。

……………うん、いまひとつよくわかつてない顔だなこれ。ともあれ、親御さんに話しかけることは忘れんな、と念押ししたあと家まで送つていくことにする。ちやうど馬場さんの自転車もあることだし、2人乗りだぜヒヤツハーア！ とかやろうとしたらすつころんだ。そういうえば、わたし転生してから自転車乗つたこと無かつた……………っ！

あああ、泣かないで泣かないで。だいじよーぶだいじよーぶ、ちよつと手のひらすりむいただけじゃないこんなのツバつけとけば治るよ！ 治るよ!!

後日聞いた所によると自分の怪我よりわたしが血いだくだく流してたことにびつく

りして泣いてたそう。まあ転んだときに庇ったらとんがった石でざっくり切っちゃったもんなあ。つーてもたかだか皮一枚だし、3cmも切つてないんだけどなあ。ま、それはともかく馬場さんの家で手当てしてもらいました。でもこのくらいの怪我はいつものことなんだけどな。

そんでついだとばかりにごはんご馳走になっちゃって、さらに夫婦喧嘩で馬場さん——呼びにくいな、蕎子ちゃんだからシヨコと呼ぼう——が居心地悪い思いしてたと伝えて仲の改善を促してみたり。まあ、がきんちよー人の言でなにか変わるわけじゃなからうが、こういうのはまず動いてみるもんさ。やるだけやってみようや。

で、シヨコとつるむようになって3ヶ月が過ぎた結果。馬場さんちのパパさんは見事に通院患者にジョブチェンジしました！わたしのせいじゃないぞ!?

いや、夫婦喧嘩の原因は元キヤリアウーマンだったママさんがシヨコも手が掛からなくなってきたから仕事に復帰したいと言い出したことで。それをパパさんが、いや、君がきつちり家を守ってくれてるから僕は安心して仕事が出るんだ、出来ればこのままできてくれないかと反対。それでまあ、ちよつとエスカレートしそうになってたわけだけど、シヨコとわたしの意見で歩み寄りを見せてたわけだ。

ところが好事魔多し。

どこで聞きつけてきたか知らんが『女性の権利を主張する主婦の会』とかいう女性団体……市民団体？ が夫婦の間に割り込んできた。いわく、女性の働く権利を認めないつもりか、とかなんとか云々。で、パパさんを攻撃し始めた。

これがまたいやらしいと言うか陰湿なやり口で、あつという間にパパさんは追い詰められて職場を自主退職させられた挙句に気鬱を患って病院のお世話になるハメに。そしてパパさんがそんなになつちやつたから結局ママさんが働きに出ることに、と。

わたしはひたすらシヨークのフォローに奔走するので手一杯な状況。いやだつてあいつらシヨークの方にまでちよつかいかけてきていらんこと吹き込もうとしたり、誘導尋問仕掛けて余計なこと言わせようとしたりでうつとおしいことこの上なかつたんだもん。

じいちゃんばあちゃんの伝手やらPTAやらを通じて連中に対しての注意喚起はしてみたけれど、PTAって基本ママさんの集まりじゃん。逆に連中に同調しちゃう人も出てくる始末で……。

うーん、子どもの身の限界を感じさせられたぜ。

で、そんなこんなでママさんが働いてパパさんが療養という状況になつちやつたし、シヨークも軽く対人恐怖症気味になつちやつたので彼女の面倒はうちでみることに。とはいってもまあ学校から帰ってきて夕方まで預かるくらいでたいしたことじゃない

けど。

それでも慣れてるわたし相手じゃないとシヨークの方に負担掛かるしねえ。

それからはバスケットがある月・水・金はクラブ終わるまで学校の図書室で待っててもらって、そうじゃない日はうちに直帰して、一緒に本読んだりお絵かきしたりゲームしたり。

学校の勉強以外で本を開くのはちよお久しぶりなのでコレはコレで楽しんでる。

だからそこ、こつそり「雪菜が女の子らしい遊びをしてくれるようになったのが不幸中の幸いだわ……」とか言ってるんじゃないよおかん。

そもそも、わたしは前世ではオタクだった。今でもその気質は残ってるので、こういうインドアな遊びも好んでいるのだよ。今までは体を動かす欲求の方が強かったからそつちを優先させてたけど、それもバスケットで解消させられるようになったし。

ちなみにバスケット部では上級生に混じって練習します。幼児期から暴れまわってたせいか練習についていけちゃうくらい体力ついてたんだよねえ。おかげでクラブ内ではスタミナお化け扱いされとります。

そうそう、家のお手伝いもちゃんとやってるZ E? なんて掃除洗濯お料理なんかのスキルも地味に上達中じゃ。まあコレに関してはおかんとばあちゃんのお教え方が上手いからだろうな。

さて、馬場さん家の一件以降、新聞やネットニュースなんかもチエツクするようになったけど連中、たまに問題を起こしているようで。うちのご近所だけでなく、他所の土地でも揉め事を起こしているんだが、あんまり取り上げられてない。問題になっても、無罪放免か驚くくらいの軽い罰で出てきてる。

これはあれかな。いよいよ女尊男卑主義が表面化しだしたかな。

うーん、ガワだけとはいえ同じ女性として、こういう声が大きくて人の迷惑顧みない連中と同一視されたくはないなあ……。

*

さて、5年生になった今年度、いよいよあのイベントが開催される。

そう、第1回モンド・グロツソである。

日本代表は原作でもおなじみ織斑千冬。選考会の様子も放映されてたけど、うん、他の連中じゃ相手にならんね！ 真面目にレベルが違いすぎて鎧袖一触どころじゃなかった。まさしく指先一つでダウンさレベル。

この調子なら日本の優勝はカタいな、とお風呂上りのほこほこモードで牛乳飲みながら中継を見る。

1 回戦第1試合からいきなり織斑千冬の登場か、うわ暮桜マジ綺麗な桜色……とか余裕持つて観戦出来てたのも対戦相手が出てくるまでだった。

対面には全身装甲が主流の第1世代において珍しく顔を始めた各部の素肌が露出したIS。

深紅に小豆色が各部に入っているその機体は、他のものに比べるとひどく小さかった。なにせ暮桜で全高3m越えるのに、こちらは2m強くらい。左手には縦に長く引き伸ばした八角形の実体シールド、右手にはメイン武装となるビームライフル。

何より目を引くのが、頭部ユニットのV字型ブレードアンテナ。

どう見てもガンダムですありますがとうございしました。それも明貴美○デザインのMS少女版です。あとカラー、それキヤスバルガンダムだろおい。

製作はアナハイム・エレクトロニクスだそうです。

極めつけに、パイロットはインド代表のララー・スンスンさんです。

もうどこからつつこんだらいいのかわからないよ。

当然のごとく思いつきり牛乳吹きましたが、なにか。

そうやってむせている間にあつという間に試合が終盤戦に突入。展開早過ぎやしませんかねえ？

なんてボケを挟める余地が無いくらい双方ぼろぼろになっていたのには驚いた。

ガンダムは頭部ユニットと右腕部を喪失。シールドを捨てて左手にビームライフルを装備しなおしていた。ハイパーセンサーに不調が出ているのか、暮桜を見失ったらしくゆっくりと周囲を見渡している。

一方の暮桜も両脚部を喪失。背部のスラスタも完全に沈黙しており、もはやP I C制御でしか移動できないようだ。当然、機動戦なんて望むべくも無い。

暮桜がゆっくりとガンダムの上を取る。ガンダムは気づいていない。

そしてP I Cを切って自由落下、重力を利用しての斬撃か。

瞬間、ビームライフルの銃口が跳ね上がった。暮桜を捉える。間髪入れずに発砲。

斬撃と射撃、お互い同時に被弾。そのまま地に横たわる両者。勝敗は判定に委ねられ……。

勝ったのは暮桜だった。

結局、第1回モンド・グロツソは織斑千冬の優勝に終わった。

暮桜に傷を与えたのはガンダムだけという有様だった。2回戦で戦ったアメリカ代表なんて修理が終わってない暮桜相手に10秒持たなかったもんなあ……。

なにはともあれ、大いに盛り上がった第1回大会だった。暮桜vsガンダム戦は今大会ベストバウトに選ばれ、末永く語り継がれることになったのだった。

しかしなにをどうやったたら暮桜の背中にガンダムハンマーを当てられるのか。試合の映像を何回見直してみても良くわからないんだけど……？

*

小学6年生。ついに最終学年である。

うちの学校では6年生女子を対象に身体測定と平行して簡易I S適性検査を行っている。

で、本日その検査結果が返ってくるわけだ。

ぐっと身長が伸び、あちこち膨らんだり引き締まったりしてけしからんボディを獲得してかわいやらしく成長したシヨコと2人、たあいなおしやべりしながら先生に呼ばれるのを待つ。

程なくして名前を呼ばれたので教卓まで行って検査結果の書かれた紙を受け取り、中身を見ずに席まで戻る。こういうのは「せーの、」で見せ合いっこするのが楽しいのだ。周囲の喧騒ををBGMにシヨコが受け取ってくるのを待つ。ついでに、去年同じク

ラスになって以来やたらと突っかかってくる浜田さんちの香奈ちゃんも待つててやる。彼女、何が気にいらんのかことあるごとに勝負を挑んでくるのだ。まあ、競い合うのも楽しいから受けて立ってるんだけど。こんかいは当然のごとく適性ランクの高さで勝負らしい。これ、細かい数値出たつけ？

で、3人揃って誰から開く？と目配せしあう。こういうときに真つ先に動くのは香奈だ。

公共料金の用紙みたいになってる紙を端っこからそつと開き、

「見なさい！ Bランクよ！」

と高らかに宣言。おおくく……と教室がどよめく。小学生でBとかすげーな。マジ才能あるんじゃないかねーのこいつ。続いてシヨーコが開封。

「あー、Cだったー」

とちよつぴり残念そう。いやいや、Cでもじゆうぶん高いから。うちのクラス女子15人中4人しか居ないからいまのところ。

で、最後に残ったわたしが開封、目を通す。

凍りつく。

「……？ 雪菜ちゃん？」

「なによ黙っちゃって。そんなに悪かったの？」

にやにや笑いの香奈がわたしの手の中から用紙をひったくって目を落とす。同じように動きが止まる。

横から覗き込んだシヨークも同じく。

様子がおかしいわたしたちが気になったのか、他の女子もわたしの検査結果用紙を見る。悲鳴が上がった。

簡易 I S 適性検査結果：S

………What's?

3 話

さて、簡易 I S 適性検査でわたしが S ランクの適性を持っていると判明して 1 週間が過ぎた。

少々騒がしい 1 週間だったと言わざるを得ない。

まず翌日には全校に噂が広まっていた。その次の日にはご近所にまで噂が浸透していた。3 日目にはかの名門校、聖マリアンヌ女学園を始めとした I S 学園への進学率の高さを売りにした学校からのスカウトがくるようになった。1 日飛ばして 5 日目には I S 関連企業からも話が来た。まあこれはとりあえずツバつけとこう、くらいの意味合いだろうか。

まあそこはいい。たいした問題じゃない。個人的にはうつつとうしいけど、人の口には立てられないし、スカウトマンたちのお仕事はスカウトだ。そこに文句つける気はない。

しかしながら 6 日目。すなわち昨日の一件はさしものわたしもどつと疲れた。

「うゝゝゝあゝゝゝ……」

「どうしたの雪菜ちゃん？」

「おお、シヨールコおはよう。なぐさめておくれー」

登校して早々に机に突っ伏しているとシヨールコがやってきた。これ幸いとばかりに手を伸ばすとなんの疑問も持たずに抱きしめてくれた。おお柔こいのう柔こいのう。ふへへ、幼馴染の役得じやのうこれは。

しかしシヨールコがランドセル背負つてるとインモラル臭がすさまじいな。

「おはよ。朝っぱらから何やってんのよあんたたち」

「おはよう香奈ちゃん」

「おはよーかなーん」

「かなーん言うな。で、なによ。つかれた顔して」

何があつたか、なんて。言つてしまえば一言で済む。祖父母からの連絡が来たのだ。母方の。

「……いいことなんじゃないの？ それは」

「だよね？」

「ふつうに声が聞きたくなつたから電話したー、とかならわたしもこんなに疲れてないっての」

10何年かぶりに連絡してきたおかんのおとん、すなわち祖父はどこから聞きつけたのか、わたしがSランク適性を持つてを知っており、尚且つ日本に居たのでは

その才能を生かせない、ドイツに移住しろと言ってきたのだ。当然のことながらおかんがぶちギレた。ドイツ語で淡々と会話してたのが余計に恐怖を煽る。

うん、ちよおこあかった。

え、つと。それはともかく。

そもそもの話。なぜにおかんが祖国ドイツを離れて日本で暮らしてるのか。なぜおとんが居なくて、なのにおとんの実家である三河家にお世話になってるのか。わたしはその辺の事情を知らずにいままで過ぎてきたわけだけど、今回おかんのほうのじいさんが連絡入れてきたので良い機会とばかりに一通りの事情を聞くことになった。

で、聞き終えた感想はただ一言。おかんまじ鬼畜、だ。

なんでも、ドイツに留学していたおとんがバイトでおかんの家庭教師をしたのが出会のきっかけだったとか。で、おとんに惚れたおかんはおとんに果敢にアタックしたけど梨の礫。まったく相手にされなかったそうだ。

まあそらそうだ。いい年こいた大人の男が、12も年下の少女の言うことなんて真に受けるわけが無い。

それでも諦めきれなかったおかん。いろいろ思いつめた挙句にひどい行動に出た。一服盛ったのだ。そしてそのまま一発やって必中、わたしを身ごもったそうなの。

で、墮胎できなくなる時期まで隠し通した後、両親に大暴露。おかんの実家は軍人の

家系だったとかで、厳格な家庭だったために余計に大混乱。じいさんが勢いで勘当だと言い出したのをこれ幸いとありったけの貯金を手に家出、そのままおとんの元に転がり込んで、日本にまでついていったそう。

そんなこんなですったもんだのあげく、おともも絆されたのか覚悟を決めたのか、責任とつて結婚しようとした矢先に事故死。異国日本でひとりぼっちになったおかんを引き取ったのがおとんの両親、つまり三河のじいちゃんばあちゃんだ。

それからおかんは専門学校に通って手に職を付け、学校の先輩が興した会社に就職して現在に至る、と。

……これ大体おかんのせいだよな？ 不屈のメンタルと無双のバイタリテイの持ち主と言ってしまうえば聞こえは良いけど、諸悪の根源おかんだよね？ 若気の至りってレベルじゃねえぞ。あと三河のじいちゃんたちも人が良すぎるだろう常考……。

そこらへんに冷たいツツコミを入れたらやらかしてた自覚はあつたらしくマジヘコんでた。うん、本気で反省しような？ 前世での知識と経験があるからさつくり受け入れられたけど、これ普通はわたしが盛大にグレルルートだかな？

そんなようなことをお昼の給食の時間と昼休みを使って話したらショーコもかなーんもしよっぱい顔になりました。うん、飯時にする話じゃないね、めんご。

ま、おかん悪行はさておいて、ドイツのじいさんからの要請はきっぱり断つたしとり

あえずは片が付いた、ということだ。

とか思ってたのがフラグだったみたいで。

「……もしかして?」

「はい、ゆうべも電話かかってきました……」

翌朝、再び机に突っ伏してゐるわたしがいました、まる

「なんだか妙に熱心なんだよなあ。そこはかたなく切羽詰ってるっぽい雰囲気も漂ってるし」

なんとなく不穏な空気を感じつつ、夏物用の写真を撮りに撮影所に向かうわたし。ええ、まだカタログモデル続けてますがなにか? 妙に評判良いらしくてやめるにやめられないんだよ。最近是小中学生向けの下着とかまで扱うようになって羞恥心がマツハなんですけどマジで。

まあ現物支給で下着とか回してもらってるからこつちも助かってるけどさあ。『ファーストブラの選び方講座』とか本気で勉強になったと同時にマジ泣きしそうになっただけだ。程々にしてくれませんかねえ……。

*

そんな感じで数日過ごしてみたものの、やはりドイツのじいさんからの電話攻勢は止まず。

どうにもストレスを感じつつ勉強に励んでたら先生に呼び出されました。

さいきんはもんだいおこしてないよ!?

ちがった。なんでもわたしにお客さんだとかで応接室に。

ドアをノックしてもしもし。いらえがあつたのでなるべく神妙にしながら入室。

……? 今の声、なんか聞き覚えが……?

応接室で校長先生と談笑していた相手はわたしの入室に気づくと、ソファから立ち上がったて大きく手を広げて歩み寄ってきた。

「やあやあはじめまして! 君が雪菜Ⅱシユネーライン君かい」

見事な金髪と上背がありながらもすらりとした体躯を包む仕立ての良いスーツ。

そして何より、聞き覚えのある勇者王ヴォイス。

「僕はムルタⅡアズラエル。アナハイム・エレクトロニクス社代表取締役だ」

ちよつとまて。

「そして早速だが」

思わぬ人物との遭遇にこちらが硬直してるのに構わず、彼はおもむろに片膝をつく。すぐさまもう片方の膝も床に。

「君に頼みがある」

両の手を前につき、そのまま頭も下げて――

「どうかわが社でＩＳ乗りとして働いてくれないだろうか――っ!!」

見事な、土下座を完成させたあ――っ!?

*

しばしのち、どうにか正気に戻ったときにはすでに校長先生は退室していた。

おいこら校長先生、出会い頭に女子児童に土下座かますような不審人物と二人きりとかなに考えてんだ。

とか思ってたらアズラエル氏がネタばらししてくれた。

「なに、僕の土下座はそういう『特典』だからね。彼を責めるのはお門違いさ」

……『特典』だと……っ!?

「そう、精神抵抗判定に失敗したら僕の頼みを一つ聞かなければいけない。そういう特典さ」

お仲間なんだから、わかるだろう? 言外にそう言っている。ということはやはり

……。

「ああ、僕も転生者だよ。雪菜Ⅱシユネーライン君」

アズラエル氏の言うことには、この世界には結構な数の転生者が居るらしい。

しかも皆程度の差こそあれすべからく『ガノタ』で尚且つガンダム関係のキャラクターと同じ容姿と名前なのだそう。

ちなみに、この世界にはガンダムシリーズというアニメ作品群は存在しない。それほど感じの、リアルロボット作品の草分け、みたいな作品はあるのだが。

あれはあれで面白かった、うん。

「ということはもしかして、あのインド代表の……」

「ああ、ララア君もそうさ。彼女の特典のひとつは『超人的な勘』だ」

「……にゅーたいぶ……?」

「ではないよ。どちらかというとな某騎士王の直感スキルだ。条件さえ揃えば限定的な未来予知すらやってのける、極め付きに強力な特典さ。

ま、それはともかくとして本題に入ろうか」

うちの会社でIS乗りやらないかい?

*

アズラエル氏がわたしを見つけたのは、やはり先日の簡易IS適性検査だったそう
だ。あの検査の結果はIS委員会に一纏めに保存される。そして各国の委員会で情報
を共有されるのだそうだ。

まあ、大半の転生者は目立つ行動をとりまくるので、わたしのパターンは比較的穏便
なほうらしいのだが。

それはともかく、その検査結果などという情報の閲覧はIS関係者でなければ出来な
い。なのになぜドイツのじいさんが知りえたのか。

どうにもめんどくさいことに、ドイツ軍内部の派閥争いが関係しているらしい。

ドイツ軍には『黒ウサギ隊』というISを使った特殊部隊が存在している。

基本表には出てこないがこの部隊、ある種の実験部隊だそうで人体改造やらデザイン
ベビーやらといった少々倫理的に問題のある出自の人間ばかりで構成されているらし
い。

……ISってそういう要素もあったんだー……。へだいぶ内容忘れてる

で、そういうモノに否定的な軍人も一定数存在してるそう。そういつた一派が彼女
たち『人工の天才』を掣肘するために『天然の天才』を欲しがり、白羽の矢が立ったの
が……。

「わたしですか……」

「そういうことだね。むこうさん、だいぶ追い詰められてるみたいだね。このまま放置しておくとか少々強引な真似をしてくるかもしれない」

「で、助けてやるから自分とこに來い、と?」

「いやだなあ。ギブ・アンド・テイクだよ」

HHHHAHA、とわざとらしく笑ってみせる。……まあなんだ、社長自らやってきてるあたり、まだ誠意がある方か。なにせAE社と言えばこの世界でも巨大企業である。

アメリカはデトロイトに本社を置き、太平洋ソロモン諸島に研究所を持っている。

基本IS関係の研究開発は、国からの補助を受けないとやっていけないほど金を食わずなのに、AE社はソレを必要としない。ISの研究開発で得た技術・ノウハウを転用して汎用特殊作業車両『レイバー』を開発。世界中で販売して巨額の富を稼いでいるのだ。

おいガンダムどこ行った。

そうして得た金で米国以外の国の研究揮発にも資金援助を行い、引き換えに得た技術とノウハウをさらに転用してあちこちのIS関連事業に食い込んでるとか。

だからインドと台湾がここ開発のIS使ってるのか……。

その手は長く伸びてて、欧州のイグニッション・プランや国連軍内部にさえ伝手を持っているらしいのだから恐れ入る。

そんな超巨大企業だ。やろうと思えばいくらでもわたしを手に入れる手段はあるはず。

それなのにまずはこうして話を通しに来て……おい待て、出会い頭に土下座つてたよなお前。

「君の精神抵抗力抜けなかったんだから無問題だと思っただけどねえ」

ふざくんな。

まあ、それはともかく。まずはお引取り願うことにした。

正直 I S には多大に興味がある。だけど、いまの私の胸中はバスケットでいっぱいなのだ。我ながら、ここまでバスケットボールにはまり込むとは予想外だったけど。

「そうかい、それは残念だ」

そう言つて立ち上がるアズラエル氏。その表情は余り残念そうには見えない。

「とりあえずドイツのほうはこちらで押さえておくよ。お仲間が不本意な状況に陥るのはこちらとしても面白くないしね。

ただ、最後に一つ」

宇宙の彼方を、見たくはないか？

アズラエル氏が最後に残したその言葉は、不思議なくらい私の心に響いていた。

4 話

先月から発生してる雪菜ちゃん周りの騒ぎはいまだに沈静化して無いようでした。

でも、ドイツのおじいさんからの電話は無くなつたようで、ちよつとホツとした顔をしていました。そのかわり、こんどは別のことで悩んでいるようです。

「……ねーかなーん」

「かなーん言うな。なによ」

「わたしいつまでこうしてればいいのさ」

香奈ちゃんがあぐらかいてる雪菜ちゃんの膝の上にすっぽり収まって、背後から両腕を回して抱きかかえるようにして手をおへその下に当ててもらつてカイロ代わりにしています。

雪菜ちゃん体温高いからくつつくとあつたかいんだよねえ。

ちよつぴりきつい印象のお姉様系美少女の香奈ちゃんの背中にびったり張り付く（見た目だけは）清純派妹系美少女の雪菜ちゃん。なんだかいけないふいんきでどきどきします。

あ、ケータイで写メつところ。

ゴールデンウィークに入って、大量の宿題が出たので雪菜ちゃんちに集まって勉強会です。

けれど、香奈ちゃんがお月さまが来た、とかでぐったりしたので雪菜ちゃんをカイロ代わりにしておなかを暖めているのです。

「勉強できないんだけど」

「あんたどうせ宿題終わらせてるんでしょうが」

「まあね」

普段の言動がやんちゃぼうず系のくせして雪菜ちゃんは勉強もできるのです。ちよつとずるいです。

「シヨーク、助けておくれ」

「んーと、宿題見せてくれたら」

「それはダメ。自分でやんなさい」

こーゆーとこ、割と真面目さんです。そういえば授業中も男子見たく騒いだりしないよね雪菜ちゃんて。

「……で」

それからしばらく。黙々と宿題を片付けていた香奈ちゃんがひと段落つけたのか、シャーペンを置いてまだ背中にひつついてる雪菜ちゃんに問いかける。

「……んあ？」

ねてたらしい。おのれー。

「あんだ、何か迷ってるでしょ」

「……なんのことかなー」

「下手な誤魔化しはやめなさいよ」

香奈ちゃんの鋭い切り替えしに沈黙する雪菜ちゃん。いいぞもつとやれ。雪菜ちゃんがここしばらく悩んでいるのには周囲の人間みんなが気づいていることです。それを相談してくれないのは寂しいのです。いけずさんめ。

んー、とかあー、とか唸ってた雪菜ちゃんも観念したのかぼつりぼつり話し出した。

なんかぐだぐだ言い訳がましかったけど、ようするにISとバスケット、どっちを取るかで悩んでたらしい。ISを取るならAE関係のところ。バスケットを取るなら地元の強豪中学に行きたいのだから。

「なんでAEI択なのよ」

「他の所はあんまり面白くなさそうで……というよりも、物足りなさそうでさ」

「聖マリアンヌとか選択肢としては良いと思うんだけど？」

「普通にIS関係の仕事に就きたい、てんならね。聖マリアンヌからIS学園は鉄板だろうなあ」

それだと面白くない、って顔に書いてるよ雪菜ちゃん。

「それにさ、バスケのほうにも未練、あるしさ」

ちよつとだけ。ちよつとだけ、目を伏せて言う。あ、これ嘘ついているときの癖だ。

香奈ちゃんと顔を見合わせ、ひとつ頷いて、せえーので声を合わせて。

「ばあーか」

「ひどっ!?! いやほんとにひどくないっ!?!」

「ふん、つまらない嘘吐くからでしょうが」

「いや嘘って」

「大方、私がバスケ始めたのはあんたがきっかけだから、とか考えてるんでしょ。でも残念でした。私がやりたいのはあんたをへこませてキャン言わせることよ。あんたが別のものに力入れるってんならそっちで叩きのめしてやるだけよ」

おもわず沈黙するあたしと雪菜ちゃん。うん、この発言はアレだ。なにやっても着いてくから覚悟しとけ宣言ですよ。うっかりすると凄い重い台詞だよな？

思わず目を見合わせるあたしたちになによ、って顔を向ける香奈ちゃん。

「ん、いや。そっか、そっかあ……」

いまだ抱きついたままの香奈ちゃんの背中に顔を伏せる雪菜ちゃん。めずらしい、照れてる。

「あんがと、かなーん」

「だからかなーん言うなつての」

「あたしも雪菜ちゃんのやること、応援するよ?」

「うん、シヨークもありがとう。そーかー、叩きのめしに来てくれるかー……。」

——着いて来れるか?」

「はっ、そつちが着いて来いつてのよ」

顔を伏せたまま、問いかける雪菜ちゃんにやりと笑つて返す香奈ちゃん。うん、この二人はこうだよね。

「うん、ふふ。なんだろ、すごいホツとした。すげー爽やかなかんじ。こんなすがすがしい気分にかけてくれた二人にはなんかお礼しなきゃな」

「あ? いいわよ別に。あんたからお礼とか……こらちよっ!? どこに手を入れて……っ!?!」

「うんうんえんりよすんなー。服の上からじゃなくて直接擦つてやるわー。……ぐへへ」

はいセクハラモード入りましたー。雪菜ちゃんたまにすごいすけだよね。

どつたんぱつたん騒ぎ始めた二人が雪菜ちゃんのおばあちゃんに雷を落とされるま

で、あと5分。

5 話

夏休みである。

ゴールデンウィークのあの日、親友2人に背中を押される形で決心したわたしはまず家族に本心を打ち明け、理解を得るところからはじめた。

この時期、ISは第1回モンド・グロツソの影響もあって世界的な大ブームを巻き起こしていたが、実際関わりを持つとする意外に難しいものがあつた。

考えても見て欲しい。もともとは宇宙開発用に作られたはずがその有用性から軍事に転用され、さらにはスポーツへと姿を変えていったのである。ぶっちゃけ心理的抵抗があるというかモータースポーツのように敷居が高い印象があるのだ。長いこと戦争してない日本だと尚更である。

しかもわたしの場合、国内のIS関連学校に入学したいというのではなく、海外の企業からのスカウトを受けたいという話なので親からしてみれば余計に心配になる話である。

当然のことながら話し合いは紛糾。喧々諤々な怒鳴りあいには……はならなかったけど、ちよつとケンカみたいな状態に。転生してから家族大好きっ子になってるわたしと

してはこの状況が長く続くのはかなり嫌なので早々に切り札を切らせて貰うことにした。

助けてアズラエもくん

「デジタルなモンスターみたいな呼び方やめてくださいよ」とちよつとばかり嫌そうだったけど協力を取り付けることに成功。そこからはわりとあっさり気味だった。

福利厚生も勉強も、A E社の力でしっかりフォローすると確約してもらい、さらに私自身の言葉でもって熱意をぶつけた結果、しぶしぶながらI S乗りとしてA E社所属になることを認めてもらえた。

基本的にはA E社所有のI S研究所で寝起きしてテストパイロットとして働き、義務教育は家庭教師に通信教育で賄うということに。学籍自体は研究所がある島に建てる学校に在籍。学校に通う頻度は少なくなるんじゃないかな？

さて、説得成功したとはいえ早々簡単に納得できるはずもない今回の一件。いったいどういう環境で働くことになるのか、この目でしっかり見てみたいという話がばあちゃんとおかんの二人から飛び出してきた。

親としては当然の主張だろう。そんなわけで小学生最後の夏休み。A E社見学ツアーと相成りました。

あ、シヨークとかなーんもついてきたよ。

*

そんなわけでソロモン諸島の空の玄関口、ホニアラ国際空港に到着である。最近は成田のみならず羽田からも国際線が発着しているのが助かるなあ。うちからだと羽田の方が近いんだよ。

初めての飛行機&海外旅行でうかれぼんちつてるショーコとかなーんをあしらいなから迎えの人を探すと『Welcome! 三河家ご一行様』と書かれた看板を持った二人組を発見。同時にむこうもこっちを見つけたらしく近寄ってきた。

「三河家ご一行様ですね? お迎えに参りました、ノエルⅡアンダーソンです」

「同じく、レイコⅡホリンジャーデス」

ゲームキャラキター!? アズラエル社長曰く、ガンダム系作品登場キャラは基本転生者だそうだからこの2人もそうなんだろうなあ、と思つてたらパチリとウインクされた。どうやらわたしの想像通りらしい。

そのウインクをどういう意味に取つたのか、ショーコがぎゅつとわたしの腕を抱きしめてきた。おお、柔らかなのう。

「では、わが社所有のIS研究所までご案内いたします。皆様、どうぞこちらへ」

「乗換えてばかりですケド、もうスコシだけお待ちくださいネ」

そんな2人の案内で飛行場の端にあるヘリポートへ向かうわたしたち。何でも離島を一つ丸ごと買い取って使ってるのだとか。セキュリティ保持とか安全問題とかでいろいろあるんだろなあとか思いながらも、前世及び今生通して初のヘリコプター搭乗にテンションが上がってしまっただけなのでした。

あんまりショーコたちのこと言えないね！

*

IS 研究所は、ちよつとしたひとつの街でした。

メインの研究施設のみならず、所員が暮らすための寮だけじゃなく、家庭持ちのために小規模ながら住宅街があり、ショッピングモールなどの各種商業施設に娯楽産業、病院や消防に所員子弟のための学校まである徹底振り。へたすると一生ここで暮らしていけるんじゃない？ てくらの施設が充実していた。

到着初日は移動疲れがあるだろうとすぐに来賓用の宿泊施設送りにされたものの（そして実際疲れてたので飯と風呂を済ませたらみんなあつという間に寝てしまった）翌日からはあちこちを見学させてもらった。

案内はノエルさんとレイコさん。こつそり確認したところやつぱり転生者だそうで、ノエルさんは飛び級で大学卒業してアズラエル社長の秘書、レイコさんは学生バイトの身ながら既に内定決定してるそう。優秀だなあ、と思う反面こーゆー雑事をやらせて良いのかと申し訳なく思ったりも。

「ああ、いいね別ニ。気にしなイ気にしなーイ。……ワタシがいないとノエルがなにやらかすかワカったモンじゃないし……」

「やーねえレイコつたらもう。何もしないわよ、今は」
今はつったぞおい。

不穏な発言に引つ掛かるものを感じて改めてノエルさんを観察してみれば。こつそりショーコとかなーんに対してハアハアしたり鼻息荒くしたりよだれ垂らしたり……それでいながらうちの家族やhshsされてる当人たちには一切気取らせないあたり無駄にハイスキルを發揮してたわけで。

……能力のある変態ってたち悪いんだなあ、とつくづく思わされましたよええ。
ちなみにこのノエルさん、わたしの家庭教師役をやる予定なんだぜ？

*

さて、初日は移動。2日目は周辺施設の案内ときて、3日目はいよいよ研究所内の見学をさせてもらえることに。

とは言っても来客用パスでは対して見れるもんもなく。そうして連れて行かれた先は実際にISを動かして各種テストをするためのアリーナ。その格納庫にはAE社開発の第1世代量産型IS『ガンダム・マイルド』こと、略称GMが鎮座ましましておりました。

「……これジエガンだよね？」

「GMです」

「いやこれジエガンだよね？」

「GMです」

「いやいやジエガ「GMです」ん、って被せたなおい」

まあわたしとノエルさんとのやり取りはさておき。

目の前に置かれたテスト用に黄色く塗装されたGM（見た目はジエガン）にテンション上がりまくりのわたしたち小学生3人組。そんなわたしたちにノエルさんが一言。

「じゃ、乗ってみましょうか」

「「……は……」」

なんで3機もあるのかと思ってたらそういうことかい！

なんたるサプライズ！ 素敵!!

渡されたISスーツを手に更衣室に駆け込むわたしたち。おかんたちはISの調整をしていた技官の人に連れられて管制室に移動です。

「ただいまー」

「あらレイコ、どこ行ってたの？」

「ああウン、更衣室に隠しカメラが仕掛けられてたから撤去してきた」

「……なん……だと？」

「やっぱりお前カ」

……聞こえなかったことにしておこう、うん。

*

「うはははははははははははははははは!!」

ISジェガン（わたしの中ではこう呼ぶ）を装着してアリーナに出てきて1時間。わたしはアリーナの空を悠々と飛んでいた。

最初のほうこそ管制室からの指示で操縦に慣れるための準備運動みたいなことをしていたのだが、30分くらいでさつきと慣れてしまった私はこうやって自在に飛び回り

始めた。

いやすげー!! ISマジすげー!! この爽快感はクセになるぜエーっ!

ちなみにショーコとかなーんはまだ歩いたり走ったりジャンプしたりしてます。I S初搭乗だとアレが当たり前のはずである。改めて思うけどチートボデーすげーな。あ、2人が飛び始めた。かなーんの方はまだしっかり姿勢を保っているけど、ショーコはちよつとふらついている。うっかりすると制御が乱れた勢いで集中が途切れてあらぬ方向に吹っ飛んでいきかねないので手を取って補助してやる。

「雪菜ちゃんありがとー」

「どういたしましてー」

で、そのままさらに30分ほどゆらゆらふわふわ飛んでいたらわたしたちが出てきた格納庫とは反対側の扉から何者かが格納庫に飛び出してきた。

《楽しそうね。アタシも混ぜてよ》

プライベートチャンネル、だったか。通信を繋いで声を掛けてきた相手は……ぴんく?

「……だれだおまえ」

《あら、ご存じないかしらあ?》

わたしたちが纏っているジエガン（GM言うな）とは違う、ピンク色に染められたス

マートなISを身に纏ったロングヘアの女が笑って言う。

《アタシこそ、IS乗りとしてチャンスを掴み、アイドルマスターの座へ駆け上がったいる、超時空シンデレラ、ミーアキキャンベルちゃんよお!》

びっぴびっぴばっばっ! と気合入れてポーズ決めてそんなことのたまってくるピンクいの。あ、口で「キラッ☆」とか言いやがった。

《かえれ淫乱ピンク》

《ちよっ!! 誰が淫乱ピンクよっ!!》

《……え、アイドルってお偉いさんってちなこととして仕事とつてくるのが基本なんじゃないの?》

《違うわよ! なにその思い込み! ていうか隣のお友達がサンタさんは居ないと知らされた幼稚園児みたいなシヨック受けた顔してるからやめたげなさいよ!!》

あ、やべ。ついうっかり社会の暗部を彼女たちの前で暴露してしまったぜ。だがこれだけは言わせて貰う。

《でもピンクは淫乱というのは定説って物の本に》

《どこの本よそれ!》

《山本君が竹やぶから拾ってきた本に載ってた》

《誰よ山本君って!?!》

横の2人、あーあいつかーみたいな顔しない。

《ま、まあいいわ。あなたたち、うちに見学に来た子たちよね?》

「あ、はいそうですー」

目の前のピンクいのに律儀に返答するシヨコは真面目さんでかわいいなあ。というかこいつも間違いなく転生者だよなー。

ちなみにプライベートチャンネルで話しかけてきてるミーアさんに対してシヨコは肉声で返答してる。わたし? なにげにさつきからプライベートチャンネルを使いこなしてますよ。

《じゃ、せっかくここまで来たんだし、ちよつとおねーさんと遊んでいかない?》

《気をつけろ2人とも。こいつ……肉食系女子だつ!》

「ええっ!」

《まちなさいよ! なんかひどい誤解してない!》

《ISの装甲の隙間から見えるISスーツがものつそいえぐいデザインしてるんだけど、そこんどこなにか言い訳は?》

《なによ! アタシの美貌を際立たせる良デザインじゃない!》

原作でミーアキャンベルが着てたステージ衣装からスカートを取っ払ったデザイナーのISスーツをそう評価するか。すげーな。股間とかすごいきわどい角度してるん

だけど。眼福眼福。

《もう！ 話が進まないじゃない！》

「雪菜ちゃん。せっかくだからあのお姉さんにいろいろ教えてもらおうよ」
「そうね。先輩の言うことはためになるはずよ」

まあ、2人がいいと言うならわたしからも否やは無い。

《で、なにするんですか淫乱ピンク先輩》

《だからそれやめてっば！ ……ん、そうね。鬼ごっこなんてどう？ ISの機動制御に慣れるのにはいいと思うんだけど》

ひとつ咳払いして気を落着けたミーア先輩（一応先輩だからね）からはしごくふつーの提案が飛び出してきた。おかしいな、転生者なんだつたらもつと無茶振りしてくるはず……。

《なんか変なこと考えてない？ いくらなんでも素人に無茶させないわよ》

まあ、それもそうか。

そんなわけでもまずわたしたち3人が逃げる側で。

《で、さつきから気になってたんですけど、そのISつてもしかして……》

《あ、わかる？ これぞ先日発表されたばかりの新型機、ストライクガンダム！ そのアタシ専用機として調整されたストライク・ルージュよ！》

《第2世代機じゃねーかぶざけんなーっ!!》

《なによ、エールストライカーつけてない素の状態なんだから文句言わないの。じゃ、はじめるわよー》

《くっそぜってー逃げ切ってやるあーっ!》

*

鬼ごっこが始まって30分以上が経過。

シヨコとかなーんはあつさり捕まってしまう、5分のインターバルを置いた後、再度空に上がってきたけれど再びとつかまって、それを何回か繰り返したら体力の限界に来たらしく格納庫に引っ込んでいった。で、わたしはというと最初のほうで1回捕まって、インターバルを置いてからはひたすら逃げ回っている。くっそこのピンク上手え!

途中から微妙にルールが変わって、相手の背中に触れたほうが勝ちというルールになった。

んだけど、さつきからぴったりと背後に張り付かれて振り切れねえ! さすが専用機を与えられるだけはあるなあおい!

《ほれほれー、どうしたー。追いついちやうぞー》

うぜえ！ けどこつちには言い返す余裕もない。機体の性能差もあるけれど、それ以上に向こうがこつちの飛行ルートを巧みに誘導してる。

《じゃあそろそろ……決めるわよー》

やばい！ 相手から伝わってくるプレッシャーに本気の色が混ざり始めた。このままじゃ手も足も出ないままに終わる。……それはいやだ！ せめて一刺ししたい！

何か手は無いか高速で脳みそを回転させる。とはいえ、今日始めてISに搭乗した素人に良い考えなんか思いつかない……いや、さて。ひとつ思いついた。

第1回モンド・グロツソでかのララアⅡスンが見せた不可解な機動。暮桜の背中にガンドムハンマーをぶち当てた際のアレだ。大会直後から謎機動として散々に検証されたため、今では大体のからくりが判明している。

とどのつまりは、両足に備え付けられているスラスタを片方だけふかし、姿勢が不安定になった所にPIC制御と手足を振り回した際の作用・反作用——AMBA Cと呼ばれる機動制御技術だ。名付けたのはもちろん、ララアⅡスンである——を併用し不規則な機動を描いて『落下』するとう……いうなればIS版『木の葉落とし』である。

ララアⅡスンはこれに瞬時加速を組み合わせて暮桜の背後を取ったのだ。

それをいま！ この場で！ やってみせる！

背後から伸びてくるストライク・ルージユの手。コレをギリギリまでひきつける。

……まだ。……まだだ。まだ……ここ！

「だりやあー！」

自然と口から気合の音が漏れる。思いつきりふかした右足のスラストを中心に手足を振り回して半回転、そのまま真下に落下。PICですら消しきれないGがわたしの体に襲い掛かるも、歯を食いしばって無視。姿勢を立て直して上空を振り仰いで、頭上を通り過ぎたはずのピンクのISを探す……いない？

《ざあんねん》

ハイパーセンサーが告げる。

《木の葉落としては、流石のアタシも驚かされちゃったけど》

わたしが探す、当該ISは。

《でも、あの機動技術はアタシも使えるのよねえ》

背後にいる、と。

*

香奈です。更衣室の空気が最悪です。

「ぐず、ひぐ。うつく。うつく……ひぐっ」

雪菜がガン泣きしてます。

雪菜がガン泣きしてます。大事なことなので2回言いました。ISスーツから着替えもせずに蕎子の胸に顔を埋めてマジ泣きです。雪菜が泣く所なんてはじめて見た。

……なんだろう、このムラつとくる気持ちは……。

んで、更衣室の床に正座してるミーアさんと困った顔のノエルさんとちよつと眉根を寄せて不機嫌顔のレイコさん。雪菜のママとおじいちゃんおばあちゃんはちよつと苦笑い気味。

「素人相手に泣くまで追い込むとカ。ミーアは鬼畜ネ」

レイコさんの鋭い一言にミーアさんの肩がびくんと跳ねます。

「いや、あの、その、あれはあの、つい……」

「つい、で泣かすの力。とんだいじめっ子ネ」

ぐがっふ、と変な声を上げてミーアさんが胸を押さえました。心に何か刺さったようです。

と、そこで雪菜のママがまあまあ、と止めに入りました。今回は力量差もわきまえずに突っかかっていった雪菜が悪い、とバツサリです。

まー、實際木の葉落としとかいうよくわかんない動きをしれつと返されてとっ捕まっ

て以降、軽く10回以上はミーアさんに挑んでは負けまくって。しまいには泣いちゃったわけだから……うん、雪菜ザマア、だわこれ。

「わかってる、よっ。わたし、が、よわい、つて。で、でもっ、くやしい、じゃん、つかあ！」

しゃくりあげながらのその台詞にママさんが「しよーがないわねえ。ホントに負けず嫌いなんだからあなたは」と蕎子から雪菜を受け取って抱きしめ、背中を優しく叩いてます。

「雪菜ちゃんが泣くのつて久しぶりだなあ」

「そうなの？」

「うん。雪菜ちゃん、3年生のときにバスケット始めたでしょ？ そのときからパワーとスピードはあったんだけど、上級生の人に軽くあしらわれちゃって」

「それで泣いちゃったと？」

「うんうん」

シヨコおくく……となんか恨みがましい声が聞こえてきたけど無視無視。

「とにかく、ミーアはいっぺん謝って」

「すんませんっしたー!!」

土下座する勢いでミーアさんが頭下げるけど「別にいいわよそんなの」とママさん

が軽く流しちやつた。雪菜自身も「いいつ。べつ、つに。あんた、が。悪いわけ、じゃない、しつ」とぐすぐすいいながらもゆるしてる。こりや単純に悔しいからなんだろうなあ、泣いてるの。

「つつ、次、は！ 勝つ、かなつ！ おぼえてろつ！」

「え？ あ、ああ、うん。……うん。」

いいわ。いつでも受けて立ってあげる。楽しみにしてるからね！」

雪菜の泣きながらの宣戦布告に、ミーアさんはちよつとあつけに取られてたけど、すぐに気持ちを切り替えてにやりとわらって返答した。

……かつこいいけど、正座したままじゃ締まらないなあ。

*

「……ムルタか」

『やあ、どうだい彼女は。見てたんだろう？』

「……いいね。うん。実に良い。よくもまあ、こんな逸材を見つけ出したものだ。感謝するよムルタ。」

彼女が居れば行程の3割は省ける。ミーアくんには掛かる負担も、かなり軽減できるだ

ろうし……。

なにより、あの天災に対しての目晦ましに最適だ」

『そうかい、ソレは良かった。君の方はどうだい』

「至つて順調さ。ここからはミアくんには頼めない仕事になるからね、彼女を呼んだとっろや」

『お、そうかい。もうそこまで進んだのか！ いや、流石に仕事が速いね！』

「ははは、そうじゃなきやわざわざ特典を貰った意味が無いよ」

『それもそうだ！ じゃあ、そつちのことは任せるよりボンズ』

「ああ、朗報を期待してくれ。

……待たせたね」

「なあに、構わんさ。それで？ オレは何をすればいい？」

「君には亡国機業に潜り込んでもらおうと思つてね。」

「ほおう！ そいつはまた剛毅な依頼だ」

「向こうに持つて行くコアとI Sは用意しよう。『赤』と『青』と『金』、どれが良い？」

「あー、そうだな……。赤も魅力的だが……ここはやっぱり金だろ」

「わかった、手配しよう。それと、これも持つて行きたまえ、いざというときの助けになるだろう」

「……!! おい、こいつはまさか……っ!?」

「そう、そのまさかさ。擬似I S コア……いや、こう言おうか。擬似G N コア、と」

「……マジか」

「マジさ。さあ、仕事を頼むよ。アリー||アル||サーシエス」

6話

さて、夏休みが終わって2学期が始まり、わたしの生活はすこしばかり様変わりした。まずは学業。I S 研究所内では日本語が公用語だが、ソロモン諸島自体は英語が公用語だ。ゆえに英会話を完璧にマスターするべくノエルさんから送られてくる課題をこなす日々が始まった。

とはいえもともと学校の授業で初歩的な、中学英語の予習みたいなことはやってたし、そもそもわたし自身前世からの繰り越し分があるので実はそこまで苦労はしていない。おかんの影響でドイツ語は習得してたこともあって、別言語の習得もそんなに敷居高くないのだ、心理的に。

そんな風に学業に比重を傾けると、当然ながらスポーツの方はおざなりになる。

よってバスケット部の練習には出てるけど、試合関係からはすっぱりと手を引いて出場しなくなった。

「ら、なんか「潰し屋雪菜が引退した!」って噂になつてるでござる。どゆことよ?」「そりゃまあ、あんたこの近辺のバスケット関係者の間じゃそれなりに有名人だし。それが試合に出てこなくなったんだから話題になつて当然じゃない?」

「いや、そこじゃなくて、『潰し屋』なんていう物騒なあだ名のほうに疑問が。いつの間に付いたのさこれ。『葛城小の豆タンク』とか『ちび戦車』とか言われてんのは知ってるけど」

「あー……」

「それは……」

「なんか知ってんな？ きりきり吐けやこら。」

「去年の2学期の試合覚えてる？」

「ほら、あんたにしつこくダブルチームかけてきたアレ」

「あーあーあー、覚えてる覚えてる。ウザかったけどちよつと面白かったな」

「当時はドリブルで相手ディフェンスを華麗に抜き去るのにハマってたんだよなあ。」

「で、あの試合でマークに付いた2人をさんざんに振り回してスタミナ切れに追い込んだでしょ」

「パスとかフェイントとか、なんかいろいろやってたよね」

「アレはアレでいろんなやり方試せて楽しかったな！」

「どーも相手さん、わたしがドリブルで呐喊するしか能の無いワンマンフォワードだと思っただくさい。んなことねーのに。」

「それで最終的には相手チームみんなバテバテで、整列して挨拶するのもまともにでき

なくなるくらいへとへとになるまで追い込んだでしょ？」

「いつのまにかラン&ガンみたいなことになってたな」

結局あれ以降、うちのチームの基本戦術はラン&ガンである。さすがに最初から最後までフル出場で走り回り続けられるのはわたしだけだけど、他のメンバーも小学生離れしたスタミナ持つてるんだよな。て、ちよいたんま。

「あー、もしかして？」

「うん、あの試合が原因でバスケが嫌になっちゃった子がいたらしくて」

「やめちゃったと」

「そのとおりよ」

これは潰し屋言われるかなあ。

「で、わたしに気を使って秘密にしてた？」

「うん」

その気遣いはありがたく受け取っておこう、ということでの話はしゅーりょー。さ、テキストの続きやるべ。

と、この場はこれで終わったのだけど。後日別のチームの友達から「お前ほんとにバスケやめるの!？」と連絡が入ってきた。この件、意外にあちこちで話題になってるみたいなのでうわさ話の鎮火と勉強三昧で溜まったストレスの発散もかねてちよつとした

バスケットを開催することに。

まあイベントといってもたいしたものじゃない。市民体育館を借りて知り合いのチームに招待状出してみんなでひたすらバスケットしよーぜ！ という、それだけのものだ。カテゴリー分けるなら交流会というやつだろうか？ ちがうかもしれん。

顧問の篠塚先生（40代女性；学年主任兼務）を始めとして色んな人の手を借りてどうにかこうにか手筈を整え、開催決行。さいわい、当日は参加チームにも恵まれた。

慧心学園初等部女子バスケットボール部が参加表明してきたときにはたまげただけだな！

後年、転生で色んな世界を渡り歩いてる人と知り合いになった時に聞いた話によると。この世界、基幹設定はインフィニット・ストラトスだけれど、矛盾を起こさない範囲で他の作品世界も混入してるのだから。主に日常系萌え4コマ作品とかスポーツ物とか。割とよくある話らしい。

その人の実体験の中にはクロサギと闇金ウシジマくんとかニワ金融道が混ざってたはずなのに気がついたらガンズリンガーガールとコッペリオンとシユピーゲルシリーズが混ざった世界に変質していった例とかもあつたらしい。なにそれこわい。

ま、このときはまさかの展開にびつくりしたけど、改めて考えてみればバスケットに来ただけだから一緒にバスケットやればいいだけの話じゃん？ という結論に至って普通に迎

え入れてたけどなー。

交流会そのものはおおむね成功だったといえる。午前中はてきとーに組み合わせ決めて試合して、お昼ご飯食べたらチームメンバーをシャッフルして試合してみた。すげえ勢いでぐだぐだになってちよお笑った。でもまあ、参加してた連中も普段一緒に居るチームメイト以外と組んでバスケットすることに何かしら得るものがあつたようでよかつたよかつた。

まあ、お昼のときにちよつとトラブつたけどな。

お昼は各自用意してくるようになんて伝えていたけど、念のためこつちでも用意してた。朝4時起きしてひたすら握って揚げたおにぎりとかから揚げの山だけど。あと麦茶とスポーツドリンク、およびグレープフルーツとりんごオレンジの果汁100%ジュース。それらをでん、と置いて好きに食べ、と。男子もいたから全部片付くだろうと思つてた。

そしたら「うちの子はおにぎりはツナマヨしか食べないんです！招待した側なのに用意してないなんてどういうつもりなんですか！」とか言い出したおばさんがひとり。しらんがな。肝心の娘さんの方は「やめてやめておかしさんやめて」と涙目になってました。そういうや最近お母様方のモンペ率が上がってるとか篠塚先生愚痴つてたなあ……。

まあそんなトラブルもあったけど、交流会はとりあえずは成功と言っていいだろう。そろそろ撤収すんべー、と思つてたら慧心の子から話しかけられた。

「あの、わたしと勝負、しませんか？」

主人公の子だったでござる。たしか……港、じゃないや湊さん。ちゃん付けでいいか。なんかlonelyでやりたいそうなので最後の締め勝負することに。とりあえず10本先取ルールで。

結果は10-8。わたしの負けである。床にへたり込んで酸素スプレー口に当て、ゼーゼー言つてた湊ちゃんとまたバスケしようとして約束し、メルアドを交換した所でタイムアップ。体育館の使用時間が迫ってきたのでそこで交流会終了で解散。

実に有意義なイベントでした。

*

小学生最後の大イベントといえばこれ、修学旅行である。行き先は鎌倉に2泊3日。昔は京都・奈良だったらしいのだけど、何年か前の児童がやらかしたらしくてそれ以後鎌倉が定番になったそう。まあそんなことはともかく旅行を満喫するでしょう。

1日目はほとんど移動だけで終了。お宿のお風呂で「シヨーコの乳はわたしが育てた

「キリッ」とか言ったらすごい勢いでショーコに視線が集中したあと、大浴場がざわめいてみよんな雰囲気にも包まれた。

ふむ。やはりここはこの空気を作った私が率先して場を動かすべきだろう。胸の高さに構えた両手をわきわきと蠢かせて一言。

「……育てようか？」

ざぱっ

「のひやあああああつ!?!」

冷水! 冷水はまずい!?

「なにあほなこと言ってるのよ」

おお、香奈ちゃんマジクール……。

その冷たい視線にちよつとビビリはあったので素直におふざけをやめる。でもかなーんも結構あるほうだよな? うちら3人の中じゃわたしが一番背丈も乳サイズも小さいんだが? ああ、規格外と比べちゃって自分を過小評価しちゃってるんですねわかります。

そんなふうにはっこりした視線を向けてたら人を殺せそうな勢いでやぶ睨んできたのでそそくさと体を洗い流して湯に浸かる。

「ああそうだ」

洗い終えてとなりに浸かってきたかなーんに対して、コレだけは言っておかねばと思
い口を開く。

「尻も素敵だよ?」

づどんっ

「いげばっ!?!」

鼻につ! 鼻にお湯がつ!?

「なにを騒いでいるのあなたたちっ!」

「!!!」騒いでいるのは雪菜ちゃんだけです「!!!」

うらぎられたっ!?

その後、篠塚先生に正座で説教くらったのはいうまでもない。

おのれー。

*

2日目。

この日は午前中は学校が決めた観光名所を回り、午後から班ごとに分かれて自由行動
だった。駆け足ながらふたつみつつ見学して回った後、鎌倉大仏さまの前で一旦解散、

各自あちこち見て回るところでシヨールコが不調を訴えた。

「……おなかいたい……」

見れば足を伝う赤い滴。ソッコで近場のトイレ借りておかんに持たされてる『女の子の必需品入れ』からアレコレ取り出して処置を済ませて先生の所へ。途中、香奈に残りの班員（男子3人）を連れて近くの土産物屋に連れてくように道順書いたメモを渡して指示。あの武器屋に行かせとけばおとなしくなるだろ。それでも騒ぐようだったら鉄拳制裁もやむなしと許可を出しておく。

で、担任の有田先生と保健の増川先生ところに行つてかくかくしかじか。このタイミングで初潮とか間が悪かったねー、とシヨールコを慰める。

「それにしてもよく対処できたわね、シユネーラインさん。えらいわ」

「まあ、わたし自身もう2年になりますし。慣れました」

最初んときにはマジパニックになりました。根気強く落ち着かせてくれたばあちゃんありがとう。

「えっ?」

「?」「有田先生?」

「シユネーラインさんって……生理、来てたの?」

「……有田先生っ!!」

はい、増川先生の説教入りましたー。

いや、わたしの普段の言動が山猿だからってソレは無いんじゃないかな有田せんせー。そんなふーにいらんひとこと言っちゃうから一部から嫌われてるんだよあんた。この迂闊さがあるから卒業後の進路について話が出来ないんだよなあ……。今現在、私が卒業後に渡航することを知ってる教師は校長先生と教頭先生、学年主任の篠塚先生と保健室の増川先生の4人だけなのである。

で、先生方に送つてもらつてお宿に。増川先生に貰つた痛み止めを飲ませてショーコを布団に寝かせ、わたしはその隣で持つてきた文庫本を開く。鏡の国のアリスの原語版である。これがけっこう英語の勉強に役立つのだ。もともと、ルイスⅡキャロルが子どもに語り聞かせた即興のお話がベースになってるから難しい単語や構文は無いし、韻を踏んだ言い回しなんかを読んで楽しい。

そうしてもくもくと読み進めるともぞもぞと布団がうごめいてショーコがこつちを向いた。寝入つてはいいかなかったらしい。

「ごめんね雪菜ちゃん」

「んー、なにが？」

「えつとその、せつかくの修学旅行なのにあたしこんななつちやつたし」

「まあ、間が悪いなあとは思つたどね。でも、おめでたいことなんだから気に病まなくて

「いーよ。帰ったらお赤飯炊いたげる。楽しみにしてて」

「そのその、つき合わせちゃってるし」

「シヨークが一緒じゃないとわたしは楽しくないんだよ。言わせんなはずかしい」

しれつと言うとむしろシヨークの方が照れたのかうつぶせになって頭から布団を被ってしまった。そのまましばらくもぞもぞしてたけどひよこ、つと顔を出してきた。

「あのね雪菜ちゃん」

「んー?」

文庫本のページを捲りながら応える。

「あたし、いやな子かも」

「どうしてまた」

「……あのね」

「うん」

「せつかくの修学旅行なのにね。こんな形になっちゃったけど、雪菜ちゃんを独り占めできて……うれしいなあ、って思っちゃったの」

……やべ、キュンときたぞ。なにこの娘かわいい。考えてみれば香奈と同じクラスになつてからはずっと3人でつるんでたなー、と思い返す。

とりあえず文庫本にしおりを挟んで置いて、シヨークの横に寝っ転がる。

そのまま、こつち向いたシヨークのほつぺたを両の手のひらでむにむにとこねまわす。

「かわいいこと言ってくれるじゃんかもー」

「やあん、やゝめゝてゝよゝ」

そのまましばらくジャレてたら、わたしの方もなんか眠くなってきた。

くあ、と思わずあくびを漏らすとシヨークもちよつと眠そうだ。

「みんなが帰ってくるまで時間あるし。寝ちやおうか？」

「そうしよつか」

んじゃ、おやすみなさい。

「……ねちやつた？」

ちゆつ

*

さて、ちよつとしたトラブルもあつたものの無事修学旅行も終わり、日々勉強に（ス

トレス解消の) スポーツに励む日々。クラスの男子の間ではなんか一時期木刀がブームになってたけどまあ、男子ってそんなもんだよね。修学旅行るときに行かせた某土産物屋さんのせいじゃないと思いたい。

エクスカリバーかつけえ……とか呟いてたのは聞こえなかった。聞こえなかったかな。

で、クリスマスにショーコと香奈に手編みの毛糸のパンツ(3人分おそろい)を贈って引つ叩かれたり、年始めに3人で着物着て写真撮ったり。バレンタインに手作り友チョコをプレゼントして香奈に完勝したりしながら日々は過ぎ去り、ついに小学校を卒業した。

卒業式の日には有田先生を始めとしたほかの教師児童に私の進路を話したら本気で驚かれた。どうして話してくれなかったのと有田先生に詰め寄られたけど「だって先生口軽いじゃん」と返答したらマジで傷ついた顔してたけど……いままでの言動を省みような？

そうそう、ショーコと香奈は聖マリアンヌ女学園に進学が決まった。一般入試で合格してみせたのだ。なんだかんだ言っで一一緒に勉強してたのでがりがり学力が上がってっただよな。

そうしてわたしは一路南へ。

A E社所有のI S研究所へと旅立っていった。

それからの3年間は特に語るほどのものでもない。

ひたすら基礎訓練を繰り返し地獄を見た1年目。

今日からは応用だと言われて3色覆面やララア師匠にしごかれてより深い地獄を見た2年目。

ようやくと一人前と認められて様々な実験や実践にかりだされては精神的にキツイ思いをしながら別ベクトルの地獄を見た3年目。

しんどいけれど楽しくもあつた日々は瞬く間に過ぎ去り、15歳の冬。

いよいよ原作が始まろうとしていた。

7話

ふと、喉の渴きをおぼえて目が覚める。

布団から身を起こせば、もう3年近く住んでいる2LDKの自室だった。身じろぎする気配を感じて横を見れば、あられもない格好でタオルケットに包まるミーアが横たわっていた。

——またヤっっちゃった……っ。

額に手を当てて嘆息する。彼女とこうして褥を共にするのもコレが初めてじゃない。もう4……5回目だったかな？ 『失恋したミーアちゃんを慰めようの会』が開催されるたびにこうして押し倒されてはご乱行に及ぶ羽目になっている。

ことの始まりはここで生活を始めて数ヶ月経った頃。ちやうど日本では夏休みに入った頃だったか、IS学園に通っている彼女は専用機の調整などもあつて研究所に泊り込んでいた。そんな中、付き合ってた彼氏に振られたとかで基礎訓練課程でぼろぼろになって休んでいたわたしのところに泣きついてきたのだ。なんぼ疲労困憊だったとはいえ、泣いてる女の子を無碍にするのはわたしの矜持が許さない。部屋に招き入れてお茶とお菓子でもてなして愚痴を聞いていたのだ。

そこに酒を持ち込んだバカがいた。
ノエルである。

少し話がそれるけど、転生して趣味嗜好が変わるといふのはよくあることだろう。わたし自身、根っからのオタク系インドア派だったのがスポーツ少女へと転身を遂げているし、周囲の転生者たちも多かれ少なかれその傾向があるとのことだ。

そしてわたしの場合、もつとも趣向が変わったのがアルコールに關することだった。

前世においてはビールの350ml缶を1本飲み干しただけでべろべろに酔いつぶれ、翌日にはひどい二日酔いを引き起こしていたというのに。今生ではチートボデーの恩恵か、それともおかんから受け継いだ独逸の血がそうさせるのか、いくら呑んでも潰れるということが無かった。まさしく「ビール？ 水だろ」という言葉を体現したのだ、自分自身で。

無論、酔いはする。心地よい酩酊感に包まれることはあつたがそこ止まり。潰れることも、前後不覚になるほど泥酔することも無かつたのだ。これはこのとき始めて自覚した。

そして、自分の酒癖についても自覚したのだ。ぶつちやけ、酔つてるときは気が大きくなつてなんにでもOK出しちゃうとか、マジヤヴァイ。酔つたミーアが泣いてるのを「さあ、わたしの胸でお泣き」とかいつて縋り付かせてあやしていたまではよかつた。

……そのまま発情したあいつに押し倒されても「……慰めてあげる」とかぬかしたあんな時のわたしを殴り倒したい。

翌朝、朝チユン状態で正気に戻って放心していたわたしたちは互いにこの件については忘却しようと約束を交わし、こうなると見越していた元凶（ノエル）をげちよげちよになるまで殴り倒して録画機材を完膚なきまでに破壊したのだった。

後日、報復でヤツが作製の触手生物がみつしり詰まったプールに突き落とされてひどい目見たけど。気持ちよすぎて死にそうになるとか何処の工口ゲだ。おかげでその後しばらくの間麵類を見るだけで濡れるようになって大変だったんだぞ。

ともあれ、この一件以来絶対外で酒を呑まないようにしようかと心に決めたのだった。うっかり合コンなんかに参加しようモンなら、程よくへべれけになった所に土下座かまされてあれよあれよという間にホテルに連れ込まれて美味しく頂かれかねん。

そしてなにを血迷ったか、ミーアのやつはそれから度々失恋しただのなにがしかの失敗をしただのと理由をつけてはうちにやってきてはノエルとレイコさんを巻き込んで酒盛りするようになってしまった。そして大体にやんにやんするハメになっていた。そのへんについて一度レイコさんに愚痴ったら「いや、お前が甘やかすからだ口？」と素で返された。げせぬ。

そんな風に過去の経緯を思い返していたら眠気も去って完全に目が覚めた。窓の外は日の出前の藍色、ちよつと早いけど朝ごはんの準備でもしとこう。どうせみんな二日酔いだろから軽いヤツで良いよね。

その辺に放り投げられてたパンツを穿きなおしてリビングに。湿つてて気持ち悪いががまん、どうせ後でシャワー浴びるんだしそのときに着替えよう。リビングには空き瓶・空き缶に囲まれてレイコさんとノエルが寝てた。どうもヤつてる最中に寝落ちしてしまつたらしくノエルがタコのごとくレイコさんに絡み付いてうなされてた。ため息一つ吐いて常備してある結束バンドで手早くノエルを拘束する。なんかこういうのも上手くなつてしまつたなあ。

レイコさんがうなされなくなったのに満足して洗顔と歯磨き。ノエル？ 背中越しに手足を海老反り姿勢で拘束したのが苦しいのかうめき声をあげ始めたけど知るか。放置だ放置。で、さっぱりしたのでキッチンでお湯を沸かす。やかんを火に掛けて、その間に昨夜の酒宴の後始末。今日はゴミの日じゃないからしばらく保管しとかないといけないなあ。

そんなふーにがさがさやってたら他の3人も起き出してきた。

「……おはよう……。あたま、いたあい……」

「はいおはよう。そりゃあゆうべあんだけ痛飲してたら当たり前でしょ」

「あの、なんで私拘束されてるの?」

「……二日酔いにならないお前が、心底羨ましい……」

「それもお酒の醍醐味でしょうに」

「無視された!」

うるさいよノエル。

「コーヒーとうめぼし湯、どっちがいい」

「コーヒー。苦いノ」

「……うめぼし湯。すっぱあいの……」

「私は「お前には聞いてない」ひどい!」

お湯が沸いたのでキツチンへ。途中でノエルの体につま先引つ掛けて仰向けにひっくり返す。「肩が!」腰が!」と騒ぎ始めたけど知らん。コーヒーとうめぼし湯を淹れて持つていく。ミアアとレイコさんに手渡して、ノエル用のマグにもコーヒーを淹れてやってたので腹の上に置いてやる。

「熱っ! 熱いっ!」

「こぼしたら火傷するから気をつけてね」

「だったらこんな所に置かないで!」

「……ノエルうるさい……。頭に響くからやめてえ……」

「扱いがひどい!」 あ、でもちよつと気持ちよくなってきた……」

余裕があるな。もうちよつと放置してても大丈夫か。

そんな風に思いながら朝食の準備。とはいってもゆうべの酒盛りで冷蔵庫の中は空に近い。買出しに行かなきゃならない。今日が1日オフで助かった。まあ、だからゆうべ宴会やつてたわけだけど。

とりあえず残つてた食パンをトースターに放り込み、フライパンに油を引いてほうれん草のおひたしが残つてたので卵でとじる。手抜きだけどさつと作れてそこそこ栄養価が高いんだ。文句は言わせん。

焼きあがつたトーストに自家製マーマレードを添えて卵とじと一緒にリビングに持つて行き、オレンジジュースを人数分淹れて、顔を赤らめて達しようとしていたノエルの腹の上からマグカップを取り上げて拘束を解いてやる。ちようど良いタイミングだったみたいでまた「ひどいっ!」って言われたけど知るか。床汚されても困るんだよ。汚したら掃除させるけど。

で、もさもさ朝飯食つてたらスタンバイ状態のPCから呼び出し音が。いつもはケータイに連絡入ってくるんだけど、今日はわたし達4人がここに集まつてるからスカイプの方を使つたんだろう。とりあえず備え付けてるウェブカメラに適当な布を掛けてから回線を繋ぐ。

「おう、起きてるか雪菜。……って、映像来てないぞ？」

「おはようございます、アストナージさん。みんな起きてますよ。さすがに寝起きであられもない姿なんで映像はごかんべん」

実際、わたしはパンツいっちょの上に愛用のエプロン（ライムグリーンで胸元にハロが刺繍されてる）だし、ミーアもレイコさんもTシャツ着ただけとかワイシャツ羽織っただけとかいう格好だ。ノエルに至っては全裸だし。こんな情景アストナージさんに見せたら夫婦間に亀裂が入りかねん。せつかくの新婚さんにそれは不憫というものだ。

あ、この布ノエルのパンツだ。まあいいか。ちゃんとカメラ遮られてるみたいだし。「ああそっか、そりやすまん。すまんがちよいと緊急だ。テレビつけてくれ」

なんじやらほしい？　と思うが緊急と言うからにはなんかあるんだろう、テレビテレビく、とりモコン探したらミーアがつけてくれた。

『緊急のニュースです。昨日、日本において男性のIS搭乗適性者が発見されました……』

……あー、こういうことか。

「原作、はじまつちやうのねえ……」

ぼつりと呟いたノエルの言葉が全てを表していた。面倒ごとになるんだろうなあ、コレ。

そして1週間後、二人目も発見されたと報道された。

*

「それにしても、最近私に対してあたりがきつくないかしら？」

「そうか？」

「というか、付き合いが長い人ほど私の扱いがぞんざいなような……」

「あの、今までの自分の所業を思い返してみてくださいいね？」

「……初物おいじゅうございました!!」

「こめかみに膝ぶちこむだけでとりあえず矛を収めてくれる雪菜はかなり人間できてる
と思うんだ」

「あそこまで性欲に忠実じゃなければ普通に良い人なんだけどねノエルも」

*

「鹿児島から来ました、飛鳥慎です。よろしくおねがいます。趣味はモータースポーツの観戦、特技は剣道です。ISとか勉強してなかったんで、いろいろわからないんですけど機会があれば教えてください」

ぺこり、と一礼して着席。まばらに拍手が上がるけど、大半の女子は興味でらんらんと眼を輝かせたままこちらを注視している。正直生きた心地がしねー。

転生してからはや15年。鹿児島のじいちゃん家で剣術に明け暮れてたせいで、IS搭乗適性を特典として貰ったことをすっかり忘れてた。だから、真由に連れられてISがらみのイベントに行かなければ適性が発覚せず、こんなふうにはIS学園に放り込まれることも無かったんじゃないかと思う。

思うがまあ、過ぎたことはしかたがない。前向きに行こう。今は入学初日のロングホームルームの時間、TVアニメで言う第1話Aパートのシーンだ。

出席番号が本来の主人公、織斑一夏より前だったから先に自己紹介する羽目になって緊張したが、隣に座ってる銀髪の子が「趣味と特技は？あとなんか一言！」と書いたノートを見せて助け舟を出してくれたおかげで何とか無難にこなせた。

あんがとな、という意図で片手を立てて見せると向こうも気にすんな、と（いう意味

だと思う）笑顔で手を振ってきた。

……かわいいなあ。こんなかわいい娘、原作に居たっけ？

そんなふうには首を傾げると主人公の番になった。童顔巨乳の山田先生に促されて起立し、自己紹介しようとしたけど周囲のクラスメイトからの無言のプレッシャーに気おされている。わかる、わかるぞ。がんばれ！

と、心の中で応援していると、隣の銀髪ちゃん指先で机を叩いて主人公の注意を引く。あいつの視線が向いたら、さつきも活躍したノートを見せた。思わぬ助け舟の登場にホツとした顔で「織斑一夏です。特技は家事全般、趣味は……まあ、ゲームしたり漫画読んだり？」とにかく右も左も分からないけどよろしくお願いします！」と原作とは違う自己紹介で乗り切った。

「クラスメイトに助けられたな。感謝しておけ」

「げえっ！ 関羽!?!」

ずばあん、とすごい音がした。

「誰が三国志の武将か」

「むしろ呂布だよな？」

「あー……」

隣から聞こえてきた呟きに思わず同意の声が漏れた。あ、これやべえ。

即座に繰り出された連撃に頭を抱えて痛みをこらえるオレと銀髪ちゃん。

「誰が反骨の相か」

「そ、ソッコで反骨とか出てくるあたり……実はけっこう三国志好き……?」

「付き合いで憶える機会があっただけだ馬鹿者」

さらにもう一撃。銀髪ちゃんは完全に沈黙した。

そうして、1組担任織斑千冬先生の訓示に女子一同（一部除く）が嬌声を上げたあと早速授業が始まった。前の席の主人公・織斑一夏はIS学園から貰った参考書を間違つて捨てたとかで折檻の一撃を喰らつてた。オレもまあ、参考書を捨てはしなかったが、それでもこの内容を消化するのに難儀している。それで休み時間に金髪縦ロールですわ系のセシリアⅡオルコットにちよろつと絡まれながらどうかこうにか授業を乗り切つて放課後である。

「……つかれた……」

「疲れたなあ……。あ、オレ飛鳥慎。改めてよろしく」

「おう、織斑一夏だ。一夏でいいぜ」

「ああ、オレもシンって呼んでくれ」

すぐに移動する気にならなくてだらだらダベってたら山田先生登場。このひと本当に癒し系だなあ。

ともあれ、一夏が寮に強制移住だとかで部屋番号を伝えに来たそうだ。オレ？ オレは実家鹿児島だから最初から寮に入ることが決定してたよ。

そんなわけで連れ立って学生寮へ。後ろからぞろぞろ女子がついてくるけど努めてシカトだシカト。気にしてたら身が持たない。

寮は2人と1025。だよな。男子が2人いるんだから相部屋は当たり前だよな。共同生活にあたって、シャワーの時間やらなにやら軽く打ち合わせして、とりあえず腹減ったからメシに行こうぜ、と表に出たらちようど左右の部屋からも人が出てきた。

「い、一夏っ!?!」

「おお、箒。お前隣なのか、よろしくな」

「あら蕎子、雪菜」

「あ、香奈ちゃん」

「やつほー、かなーん」

「かなーん言うなっ!」

おおっと、なんか一気に騒がしく。というか面識ある同士ばかりかよ。とりあえず、ご飯食べに行くんだったら一緒に行かないか、と1024の銀髪ちゃんの提案で6人でぞろぞろと移動する。

……銀髪ちゃんの同室の子、でけえなあ。いや、胸もだけど背丈も。オレも一夏も170cm超えてるのに、ソレよりも確実に目線一つ分は高いぞ。

ともあれ、食堂に着いて各々食事の準備をして空いてたテーブルに集合、自己紹介だ。

「じゃあまずは私からね。1026号室、3組の浜田香奈よ。よろしく」

「え、ええと。同じく1026号室、1組の篠ノ之箒だ」

「じゃ、俺な。1025号室の織斑一夏、1組だ」

「オレも1組、1025号室の飛鳥慎」

「あたしは1024号室、3組の馬場蕎子です」

「最後にわたしか。1024号室、1組の雪菜Ⅱシュネーライン。よろしく。呼び捨てでいいよー」

……やっぱ容姿も選考基準に入ってるだろこの学校。3人とも原作での一夏ヒロインズに負けず劣らずだぞオイ。

3組の浜田はきりつ、とした美人さんだ。末広がりのボブカットにすらりとしたスタイル。巨乳というほどではないが普通にある胸。篠ノ之箒と同系統だけど、こっちは生徒会長とかクラス委員長とかやらせたら似合うタイプか。

同じく3組の馬場は長身爆乳、山田先生にも引けを取らない胸にオレらより高い身長。それでいながら下がり眉で雰囲気的にはのんびりした大型犬、といった感じだろう

か。

そして同じクラスのシユネーライン。こいつは文句無しの美少女だ。短く揃えた銀髪からはアホ毛が跳ねてて、大きなたれ目気味の瞳は光の角度によつては金色にも見える薄めのヘイゼルカラー。身長は篠ノ之に僅かに届かないくらいで、女子としては平均くらい？ だけど横に居る馬場がでかいから相対的に小さく見える。胸ははつきり言つて貧乳。でも服の上からでもふくらみがあるのは確認できる。

そういえばコイツは制服改造組だ。リボンタイじゃなくてネクタイ締めてるし、穿いてるのもスカートじゃなくてキュロットだ。総合的な印象は明るく元気なスポーツ少女、といったところか。

「おう、よろしくな雪菜」

「……一夏、お前すげえなあ」

「わたし、名字呼び捨てにされるもんだと思つてただけど……。とうか、男子には女子の名前呼び捨てってハードル高いもんだと思つてただけどさあ……。最近の男子つてこうなの？」

こつち見んなシユネーライン。そんなことねえから。そして一夏は気づけ、篠ノ之が凄いいつきで睨んでることに。ああほら、浜田と馬場が苦笑してるじゃねーか。

それからはまあ、わいわいとおしゃべりしながら晩飯食つた。香奈と雪菜（オレも

全員から名前呼んでいいと許可貰った）が割と話し上手で、上手く箒にも話を振って会話に参加させてた。

彼女たち3人は小学校からの幼馴染だそうで、境遇が近い箒もわりと話に乗れてた。よかつたな、原作みたいなぼっち気味なモツピーにはならなさそうだ。

で、メシ食い終わったら解散して部屋へ戻る。女子4人は大浴場に行くそうだ。オレらは交代で備え付けのシャワーだよ。羨ましいなちくしょう。

とにかく、シャワー浴びてさっぱりしたらベッドに転がって参考書を読みながら一夏とまたダベる。意外に話すことがあるもんだ。とはいえ、オレも一夏も今日一日で結構な精神的疲労を憶えている。いくらも話さないうちに睡魔がやってきてそのままばたんきゅー、だ。

明日からの学園生活も平穩無事に過ぎて欲しいもんだが、そうも行かないんだろうなあ……。

8話

虚空を切り裂いて飛翔する。

周囲は深い濃紺の空。眼下には青く広がる球面。わたしは今高度200kmという高高度、成層圏すら超えた、熱圏と呼ばれる領域を飛んでいた。

「センサーに感あり。間に合ったよ」

『OK。それじゃ、ミッションスタートね』

胸元に抱え込んだ相方、ミリアがプライベートチャンネル越しに伝える。今回わたしたちが派遣されたミッションは、マシントラブルによって急激に高度を下げて『落下』しようとしているISS（国際宇宙ステーション）をサポートし、無事に地表に到着させることである。

ISS、インフィニット・ストラトスが実用化されたこのご時世でもISSは現役だった。

いやむしろ、宇宙開発用として開発されながら軍事転用されてしまったISSのありを受けてその重要度はいや増していたのだろう。

NASAも、JAXAも、ロスコスモスも、ISS開発に予算を取られてなお、苦しい

台所事情の中コツコツと、地道に研究開発を続けてきたのだ。そんな彼らの努力の象徴。宇宙開発という分野の知の結晶であり研究施設であるISSが著しく高度を下げていると連絡が入ったのが6時間前。

もともとISS自体は普通に稼働していても大気と重力の影響で徐々に高度は下がっていくものなんだそうさ。それを高度が約280km付近に来たあたりでISS備え付けのスラスターやプログレス補給船なんかのサポートを受けて高度をあげる、という行為を年に何回か行っていた。

今回はISSを構成するモジュールの一つ、ズヴェズダのスラスターを使って高度を上げる予定だったのだが、何が原因なのか逆噴射に使う予定のスラスターが稼働せず、それどころか別の位置の姿勢制御用小型スラスターがでんでバラバラに噴射を初めてしまい、搭乗員は大混乱。そのまま高度を上げるところかむしろ急激に高度を下げていったのだそうさ。

このままだと大気圏再突入ルート、それも突入角度が深すぎて燃え尽きることも確定だとかで各国の宇宙開発機関は大混乱。ISSそのものも大事だけど、そこに詰めている人員もまた替えのきかない貴重な人材だ。IS万歳なこのご時世にわざわざ宇宙開発したいなんて変人一步手前の熱意をもって研究に従事してくれたベテランたちを一気に6人も失うわけにはいかないのだ。

で、解決方法をあれこれ協議した結果、ISSに受け止めてもらうという結論に達したのだけれど、この方法にもやはり問題があった。ぶっちゃけ、軍事用ISSでさえ高度200kmとかいう高高度にまで移動してISSを受け止めるとなるとスペックが足りなかつたのだ。

ただでさえ秒速7・7kmで移動しているISS。軌道予測して待ち構えてもかなりきつついものがある。

まあ、そもそも軍部の人間が軒並み尻込みしたという事情もあるらしいのだがそこらへんの詳しい事情は知らない。知らない方がいい。たぶん、きつと。

そこに手を挙げたのがわれらがアナハイム・エレクトロニクス社である。

わたしとミーアがテストしていた新型ガンダムが投入されることになったのだ。

『3, 2, 1, エンゲージっ!』

「接触成功!」

即座にあらかじめ支持された位置、落下していく方向にISS表面を這うように移動しながら内部に通信を繋ぐ。

「お待たせしました。こちら、AE社所属。スターゲイザーガンダム、救助に参りました」

『同じく、ハイペリオンガンダム到着です!』

『すまない、そしてありがとう。このような危険な任務につき合わせてしまって』

あらいい声、とか言ってるじゃねえよミーア。

「いいえ、人類の英知の結晶、失うわけにはいきませんでしょう。では、本格的な作業に移ります。搭乗員の皆さんはしっかりと体を固定してください」

そのままISSの底面まで移動、底の部分に手をつけて背部で二つに分割して細かく機体制御に使っていたメインスラスターをもとのリング状に戻してアームを伸ばして足元に展開。

一方、ミーアの方はというと互いを繋いでる連結索が切れないよう注意しながらわたしの足元に横たわる。

『うん、いい角度。良い眺めだわー』

「うるせえ踏むぞ」

おまえさつきから人の尻捏ね回しやがって帰ったらおぼえとけ。

『はいはい。そんじゃまあ、やりますか』

「はいよ。——ヴォワチュール・リュミエール、全力稼働」

『アルミューレ・リュミエール出力全開』

「『ガンダム！ 最大パワー!!』』

*

「納得できませんわ!!」

ふあつ?! ……いかん、ねてた。

ゆうべはシヨークのたわわに育つたおっぱいをひたすら愛でてたらついつい夜更かししちゃったんだよなー。途中で寝落ちしちゃったのは悪かったかな。そのせいか昔の夢見ちやつたぜ。

昔といつても半年も経ってないけど。あのあと無事アリゾナの砂漠にタツチダウン成功させたのはいいけど、それから事後処理に忙殺されて一か月くらいに寝れなかったのが大変だったなー。

それはともかく、寝てるのを叩き起こせなかった織斑せんせーが「つまらん」的な顔してたのをスルーして声の主の方を見る。

英国代表候補生、セシリアオールコット嬢が何やら気炎を上げていた。

「いいですか?!」そもそも、クラス代表は実力あるものがあるべきです! そしてそれはわたくしであり、強いて他に挙げるならばそちらのシュネーラインさんくらいのもですわ!!」

おっと矛先がこっちに向いたぞー。一夏やシンをはじめとしてクラスメイト達もこっち見てるし。とりあえず口を開かにやいかんか。

「……あー、知ってるんだ」

「ええ、ええ、存じ上げておりますわシユネーラインさん。あなたがハロウィン事件を解決した一人だということ」

ざわり、と教室の空気が揺れる。あーめんどいことになるかなー、と思ったその時、鋼の救世主が！

「え、なんだそれ？ ハロウィン事件って」

うん、一夏。お前ある意味すごいよ。

ほれ、オルコットさんがぶるぶるしてる。

「あ、あ、あ、あなたねえっ！」

「あー、一夏。さすがにその発言はオレも聞き流せねえぞ。テレビ見てなかったのか？結構な大騒ぎになったんだけど」

「えーと、いつごろの話だ？」

「ハロウィンだっただろ。起きたのは去年の10月31日。解決したのは11月1日未明」

「あー、じゃあ知らねーや。そのころ志望校決めて受験勉強に取り掛かった時期だから

テレビとか新聞とか全然見てなかった」

「…………おまえな…………」

話を聞いてたオルコットさんが顔真っ赤にしてはる。というかほかのクラスメイト達もちよつとあきれた表情だ。まー、こういうタイプの人って必ず一定数いるもんだけどね。

「あー、まあなんだ。追及はその辺で。まあ、興味ない人の認識なんてそんなもんだよ」
前世でも一つ目のロボは全部ザクだと認識してる人とかいたしな。アイルトンⅡセナは知っててもミカⅡハツキネンがわかんなかったりさ。

「あ、ということは雪菜もなんかすごい肩書持ってたりするの？」

「うん？　んー、どうだろう。わたしはあくまでA E社企業専属搭乗者、ただだしなあ」

「企業専属？」

「ほら、昨日オルコットから聞いただろ、代表候補生がうんぬんって。あれと同じようなカテゴリ分けた」

「オリンピック代表候補と実業団選手の違いみたいなものだけどねー。一般的には代表候補生の方がすごいんだよね」

「公式デビューで宇宙ステーション抱えて超長距離飛行なんていうど派手なマネした人

が何か言ってますわ……」

はいみんな、おおーとか言わない。

つか公式デビューがあの一丁ただけで非公式にはいろいろやってただけだな。

「ま、まあともあれ？ このように実績あるわたくしやシユネーラインさんがクラス代表を務めるのが筋というもの。それを物珍しいからといって極東の……」

あ、お国批判に移行した。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一不味い料理何連覇だよ」

「なっ……!!」

「料理以外でもネタには事欠かないよな。パンジャンドラムとか」

やめたげて。パンジャンドラムのことには触れるのだけはやめたげて。

「わ、わたくしの祖国を侮辱しますの!」

「アンタが言うな!」

「最初にバカにしたのはそっちだろうが」

「あー、オルコットさんや。自分は良い、人は駄目の鬼ルールは反感買うだけだよ?」

この発言にはさすがに突っ込まざるを得なかった。まわりの級友たちも苦笑いであ
る。

そしてオルコットさんは顔真っ赤である。これはくるかなー?

「決闘ですわ!!」

はいお約束しましたー。

「英国代表候補生、セシリア・オルコットの實力を知らしめて差し上げます!」

「いいぜ、四の五の言うよりわかりやすい」

「こつちもだ。さんざんよその国バカにしといてただで済むと思うなよ」

なんか盛り上がってる。

私としては正直クラス代表なんかには興味はない。興味はないけど英国のブルー・ティアーズは直接見てみたいんだよね。そういう意味ではちよいどいい機会かな。

「おーけー、こつちもその挑戦受けた」

「話は纏まったな。では、1週間後の放課後にオルコット・シュネーライン・織斑・飛鳥の4人による試合を行う。場所は……第3アリーナが空いてるな。押さえておこう。では授業を始めるぞ」

今の今まで黙って成り行きを見守ってた織斑せんせーがメタ。ここまで沈黙を保ってたということはどう転んでもいい経験になると踏んだからかな? 山田せんせーは場の雰囲気呑まれてあわあ言ってたけど。

「シュネーラインさん、あなたのスターゲイザーガンダムとの戦い、楽しみにしてますわね」

一夏とシンに挑発的な言葉を投げてたオルコットさんがこっちにも声をかけてきた。男子二人に対するよりもだいたいぶ当たりが柔らかいのはこっちをそれなりに認めてるからかな？

でも彼女にはちよつと悪いんだけど……。

「あ、スターゲイザー持ってきてないよ」

「え？」

「だってあれ理論実証機だもん。必要なデータ取り終えたからもう解体しちゃったよ」

「ええええ!!」

「ああ、試合に関しちや心配いらさないよ。ちやあんと、ウチの新型を用意してるから」

企業専属は、伊達じゃないんだZ E ☆

「授業を始めると言ってるだろうが」

轟音が4発轟きました。

*

「ああ織斑、お前の専用機だが用意に少々時間がかかる」

「はい？」

3 限目。始まると同時の織斑せんせいのお言葉。

どうやら一夏の専用機を学園が用意するという話のようだ。それを聞いてまたクラスメイト達が騒ぎ始めたところでわたしのカバンの中から着信音が。

「……シユネーライン……」

「あ、あはははは……すいませえくん……」

とりあえず電源切るべく携帯を取り出し、誰からかかってきたか確認してみると……
げ、社長だ。

「すいません先生、ウチの社長からなんでちよつと出てきていいですか？」
「……さっさと出て終わらせて来い」

許可を得たので教室を出て電話に出る。

「せんせ〜……」

「なんだ、シユネーライン」

「ウチの社長が先生と1組のみんなに話がしたいそうで……」

やめてくださいその「厄介ごとを持ち込みおつて」という目。

わたし悪くねえ！ わたし悪くねえ!! とりあえずさっさとスピーカーモードに切り替えて通話できるようにする。

『やあやお久しぶりです織斑先生！ A E社のマルチアズラエルです!』

あ、シンが吹いた。……まあ、転生者だったらここ驚くところだもんね。やっぱりあいつ転生者だったか。

周りの生徒たちもざわざわしとる。

「……お久しぶりです。ご用件は?」

『H A H A H A! そんなに嫌がらないで下さいよ。今回ご連絡差し上げたのはそちらに通う男子生徒の専用機についてです』

「織斑の専用機については……」

『ええ、存じます。学園からの発注で倉持技研が開発するとか。そちらではなく、もう一人の方です』

オレ!? とかシンが驚いてる。

「……まさか」

『ええ、ウチが用意することになりました』

周囲のざわめきがさらに大きくなる。

「しゃちよーしゃちよー、ウチ、男性操縦者にはかかわらない方針じゃなかったの?」

『ああ、雪菜か。もちろん、僕自身関わるつもりはなかったよ。役員会でも同意を得ている』

ここで周りの娘たちが「なんで？」という顔になってきたのでちよつと説明してやる。まあ要はパイの奪い合いである。現状、ISコアは467個しかない。それを世の女性約30億人で取り合ってる状況なわけだ。ここで一夏やシンといった男性操縦者が登場した。

彼らから得られたデータを応用して男性でもISを操縦できる技術を確立できたとして、467機のISを奪い合うのが30億から60億になるだけでしかない。

ゆえにウチの会社はまずコア量産の研究の方を優先させているのだ。そちらを確立させてから研究を始めても遅くはないし、よそが男性でも操縦できるようになってたとしてもそこらへんは取引でどうとでもなるとウチの会社は考えているわけだ。

「だからまー、ウチはそこらへん静観の構えだったはず……なんだけど？」
『なんだけど。……よその会社がなあ』

「なにか？」

『いえね？ 彼ら二人のISに使うコアは日本政府が供出してくれることになってるわけですが』

「それは知ってます」

『ええ。で、コアを提供するんだから開発するところはこちらで指定させろと』
「うんうん」

『それで織斑くんの機体は倉持技研で開発するように依頼を出したわけですが……飛鳥くんのほうがだね』

「オレ嫌な予感がしてきたぞ」

『コアは提供するからどこが開発するかは話し合って決めろと』

「「「なげたの……!?!」」」

マジか日本政府。屑いな。

……いや、シンを放り出してでも一夏のほうに確実に関わりたかった……ということか？

『でまあ、そんなふうにはエサを投げられたら喧々諤々。会議は踊りまくって大荒れ、その様子をウチの担当者はニヤニヤして見てたらしいんだけど』

「性格悪いなりユミーン」

『「もういつそあそこに押し付けてデータだけ貰おうぜ」という結論で一致団結しちゃったらしくてね』

「リユミーンザマア」

『まあそう言わないでくれないか。会議終わった後急性の胃潰瘍で病院に担ぎ込まれた

から』

マジザマア。でもまあ納得はできた。

「それで、飛鳥の機体はそちらが？」

『ええ、わがアナハイム・エレクトロニクス社が責任もつてご用意させていただきました。う。とはいえ、さすがに新型を右から左にポン、と用意することはできませんが……』
「彼は1週間後に試合を控えています。それに間に合わせることは？」

『ふむ、それでしたら……そうですね、間に合わせになりますが、ストライクを1機、用意しましょう。データ取りのための機材を積んだものになります。』

「あ、ええと、なんかスンマセン」

『いやいや、こちらこそすまないね。せつかくの男性操縦者に間に合わせなんかで。でもストライクも良い機体だよ。そこは心配しないでいい』

3日後の放課後までには学園に届けると約束して通話は切れた。

で、オルコットさんがこれでまともな勝負になりますわね！ とか挑発して織斑せんせーにひっぱたかれてた。そんな騒動を尻目にわたしの携帯に更なるメールが。

……アズにやんめ、厄介ごと押しつけやがって。あとでナタルさんにあることないこと吹き込んでやる。